

第5章 コミュニケーションにおける接頭辞の様相

本章では、接頭辞動詞の語形成関係が顕在化するパターンを、1) 基動詞と接頭辞動詞、2) 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞、3) 異なる接頭辞を持つ同じ基動詞に分け、コミュニケーションにおける接頭辞の多様な様相を論じる。

5.1.では、書かれた言葉において接頭辞動詞が関わる語形成関係の顕在化を論じる。

5.3.では、話された言葉に特有の言い直しと類義要素の追加に見られる接頭辞動詞の顕在化を上記の3つのパターンごとに分析する(5.3.1.から5.3.3.)。言い直しと類義要素の追加の現象はその定義が非常に複雑なため、その説明には5.2.を割いた。

5.3.4.では、書かれた言葉に素材を戻し、話された言葉における言い換えや類義要素の追加に相当する記号を伴う接頭辞動詞の用例をわずかながら扱う。

5.3.5.では、接頭辞動詞の言い直しが提起する“接頭辞の選択”の問題を考察する。

5.1. 接頭辞動詞の語形成関係の顕在化

接頭辞動詞が関わる語形成関係は、

- 1) 基動詞と接頭辞動詞
- 2) 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞
- 3) 異なる接頭辞を持つ同じ基動詞

の間で成り立つ。これらの語形成関係は、各タイプの動詞が同じテキストや発話内の近い文脈において使われている場合において顕在化する。

Imants Ziedonis は、言葉遊びをする詩人として有名である。彼の作品では、接頭辞や接尾辞を使った新語の創作のほか、接辞を持たない語と持つ語、同じ接辞を持つ複数の語や違う接辞を持つ複数の語の隣接した使用、つまり接頭辞動詞で言えば、上記の3つのタイプの接頭辞動詞の語形成関係の顕在化が、言葉遊びの手法の一つとなっている。

『エピファニー (Epifānijas)』の中の短編『11時48分に旅立とう (Mēs aizbrauksim 11.48.)』からの例文5-1では、dalīties「分かれる、共有する」を基動詞とした接頭辞動詞が6つ用いられている。pārdalīties「再分裂する」(pār-「再」)、sadalīties「分配する」(sa-「配」)、atdalīties「分離する」(at-「断」)、nodalīties「離れる」(no-「離」)、aizdalīties「遠くに離れる」(aiz-「遠」)の接頭辞動詞では、接頭辞が空間的意味において基動詞の意味修正を行っている。その中で接頭辞動詞 piedalīties「参加する」(空間的意味は pie-「接」)は、接頭辞の語彙化の程度が他の接頭辞動詞に比べて高い。この例文5-1では、接頭辞動詞の語形成関係の顕在化のタイプ1) 基動詞と接頭辞動詞と3) 異なる接頭辞を持つ同じ基動詞が観察される。

例文 5-1 (E.)

„Tev ir tikai jāpiedalās,” man teica. Un es piedalījos. Es piedalījos.
君-与 be-現3 だけ 参加する-義 私-与 言う-過3 そして 私 参加する-過1単 私 参加する-過1単

dalījos un atkal piedalījos. Un, kad es atkal biju dalījies un
 分裂する-過1単 そして 再び 参加する-過1単 そして 時 私 再び be-過1単 分裂する-能過 そして
 piedalījies, es vienu dienu jutu, ka es esmu pārdalījies. Pēc tam – ka
 参加する-能過 私 ある 日-対 感じる-過1単 従 私 be-現1単 再び分裂する-能過 その後 従
 esmu sadalījies. Kaut kas no manis bija atdalījies, nodalījies, aizdalījies.
 be-現1単 分配する-能過 何か から 私 be-過3 分離する-能過 離れる-能過 遠くに離れる-能過
 「君は参加しないといけない」と私は言われた。そうして私は参加をした。参加をして、分裂して、再び
 参加した。そして私が再び分裂して、参加をしたら、自分が再分裂してしまったことにある日気付いた。
 その後、私が分裂してしまったということも。何かが私から分離して、離れて、遠くに行ってしまった。

次の例文5-2では、顕在化のタイプ 2) 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞が観察される。例文の最後にある「参加をする必要はなくて、“加”わる必要がある」では、 piedalīties 「参加する」と pievienoties 「加わる」（接頭辞 pie- 「接」「加」、基動詞 vienoties 「一つになる」）が対比されている。後者の pievienoties には、接頭辞と基動詞の間にハイフンが置かれている。 piedalīties の接頭辞 pie- は語彙化しているのに対して、 pievienoties の接頭辞 pie- は基動詞に pie- 「接」の意味を加えている。この語彙化していない接頭辞 pie- がハイフンで区切られることで、前者の piedalīties における接頭辞 pie- の語彙化する前の本来の空間的意味（ pie- 「接」+ dalīties 「分かれる」）を読者に想起させる。これは、2つの動詞の基動詞 dalīties 「分かれる」と vienoties 「一つになる」が対極の意味であることを強調する言葉遊びにもなっている⁷⁷。

例文5-2 (E.)

Dalīšanās bija notikusi, bet nebija radusies ne jauna amēba, ne jauns cilvēks,
 分裂 be-過3 起きる-能過 しかし 否-be-過3 現れる-能過 も 新しい アメーバ も 新しい 人
 ne jauns akmens, ne jauna mīlestība! Un tad es sapratu, ka tālāk piedalīties
 も 新しい 石 も 新しい 愛 そして すると 私 理解する-過1単 従 さらに 参加する
 vairs nedrīkst. Nevajag piedalīties, bet pievienoties.
 もはや 否-してもよい-現3 否-する必要がある-現3 参加する しかし 加わる
 分裂は起こったが、新しいアメーバも、新しい人間も、新しい石も、新しい恋愛も生まれなかった！そう
 して私は、今後参加がもうできないことを知った。参加をしてはいけないけど、“加”わることならいい。

その後、分離や分裂の行為とは逆の「一つになる」という行為が例文5-3で示される。ここでは、顕在化のタイプ 2) 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞と3) 異なる接頭辞を持つ同じ基動詞が観察される。基動詞 kopoties 「丸まる、一緒になる」と vienoties 「一つになる」には、再帰要素と共に相互動作を意味する接頭辞 sa-、PFVの動作を示す接頭辞 no-、「通じて」を示す半接頭辞⁷⁸ caur- がそれぞれ付加されている。 piedrumstaloties 「たくさんの破片になる」（基動詞 drumstalot 「破片にする」）と piesmidzināties 「たくさんの水滴が降る」（基動詞 smidzināt 「降る」）の接頭辞と再帰要素は動作の高い集中性を示し、 piedalīties の接頭辞の再帰要素

⁷⁷ ラトヴィア語のアクセントは語の第一音節に置かれるが、この短編が吹き込まれている CD の朗読では、どちらの動詞にも接頭辞 pie- の後に間があり、アクセントは piedalīties と pievienoties のように置かれ、基動詞部分が強調されている。

⁷⁸ 半接頭辞 (puspriedekļi) とは、接頭辞のように動詞に前接する副詞のことである。こうしてできた動詞は合成動詞である（『標準語文法』1959, 370-374）。

とは異なるものであるが、形式的には連続した接辞の使用となっている。最後の5つのpa-動詞は、接頭辞pa-が「少し」を示す接頭辞クリップを形成している。

例文5-3 (E.)

Un tikai tad sakopoties, nokopoties, caurkopoties. Savienoties, novienoties,
 そして だけ すると 一緒になり合う 一緒になる 一緒になりきる 一つになり合う 一つになる
 caurvienoties. Bet šī pilsēta ir noburta. Šī pilsēta prasa tikai
 一つになりきる しかし この 街 be-現3 魔法にかける-受過 この 街 求める-現3 だけ
 piedalīties, tikai piedrumstaloties, tikai piesmidzināties. Papilināties. Paputekloties.
 参加する だけ たくさんの破片になる だけ たくさんの水滴が降る 霧が少し降る 埃が少し舞う
 Padrumstaloties. Pamigloties. Pasmidzināties.
 破片が少し散る 霧が少し出る 水滴が少し落ちる

そうして初めて、一緒になり合って、一緒になって、一緒になりきる。一つになり合って、一つになって、一つになりきる。しかしこの町は魔法にかかっている。この町が求めるのは、参加することだけ、たかさんの破片になることだけ、たかさんの水滴が落ちることだけ。霧が少し降ること。埃が少し舞うこと。破片が少し散ること。霧が少し出ること。水滴が少し降りること。

例文5-1から例文5-3のような文学作品において、異なる接頭辞を持つ同じ基動詞、同じ接頭辞を持つ異なる基動詞の隣接した使用には、文体的手法の一つとしての表現的側面がある。

本章では文学作品だけでなく、新聞、ブログや広告、ラジオなど多様な言語資料を基に、上で挙げた3つの語形成関係の顕在化のタイプに分けて、接頭辞動詞の語形成関係の顕在化とコミュニケーションにおける接頭辞動詞の諸相を論じる。

5.1.1. 基動詞と接頭辞動詞

基動詞と接頭辞動詞のタイプの場合、接頭辞が基動詞にもたらす意味修正は、空間的意味やアスペクト的意味、その他の語彙的意味である。

アスペクト的意味における語形成関係の顕在化は、対立アスペクトに関わる第2章や第3章、縮減アスペクトの接頭辞 pa-に関わる第4章において、PFVの接頭辞動詞とIPFVの基動詞、pa-動詞と基動詞が同じ例文中で用いられている用例を様々な例文で見た。

本節でも、接頭辞の空間的意味やアスペクト的意味、その他の語彙的意味が基動詞に対して顕在化している例を見る。

例文5-4は、接頭辞が空間的意味を示す語形成関係の顕在化の例である。「級友がオーストラリアに行く」という娘の知らせを、母は「一時的に親戚のところにも行くのだろう」と真に受けていない。しかし基動詞braukt「(乗り物で)行く」に「離」「去」の空間的意味を持つ接頭辞 aiz-をつけることで「オーストラリアに移住しに行ってしまう」と言い、空間性を明確化し、状況の本質を伝えている。

例文 5-4 (PDZ. 16.2009)

Mana meita (..) skaji paziņo – klases biedrene Kintija brauc uz Austrāliju!
 私の娘 大声で 知らせる-現3 クラス-属 仲間 行く-現3 へ オーストラリア
 Novelku – blēnas... Varbūt ciemos pie radiem? Bet viņa vairākkārt
 ため息をつく-現1 たわごと-複 多分 お客で 元で 親戚-複 しかし 彼女 何回も
 atkārt – Kintija aizbrauc pavisam.
 繰り返す-現3 去る-現3 完全に

私の娘が大きな声で知らせてきた：クラスメイトの Kintija がオーストラリアに行くの！私は「何言ってるんだか…」とため息をついた。どうせ親戚の所にお客でしょ？しかし彼女は何度も繰り返した：Kintija はずっと行ってしまおうの！

例文 5-5 では、ne tikai A, bet B 「A だけでなく B」、ne A, bet B 「A でなく B」、nevis A, bet B 「A でなく B」という表現で、基動詞と sa-動詞が対比されている。接頭辞 sa-は、知覚を示す動詞に付加されて知覚器官の鋭敏さを意味する。この例文には 2) 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞のタイプの顕在化 (sa-動詞間の接頭辞クリップ) も見られる。

例文 5-5 (LR. 04.01.2010)

Uz Zemes jāmacās ne tikai redzēt, bet saredzēt, ne dzirdēt, bet sadzirdēt,
 上に 地球 学ぶ-義 否 だけ 見る しかし 見出す 否 聞く しかし 聞き取る
 nevis just, bet sajust.
 でなく 感じる しかし 感じ取る
 地球で学ばなければいけないことは、見ることだけではなく、見出すこと、聞くことではなく聞き取ること、感じることではなく感じ取ることだ。

例文 5-6 でも、nevis 「でなく」により pasmiešanās 「ちょっと笑うこと」と smiešanās 「笑うこと」が対比され、接頭辞 pa-の持つ「少し」の意味が顕在化している。

例文 5-6 (LR. 06.10.2010)

Latviešu joks vairāk esot tendēts uz pasmiešanos, nevis smiešanos,
 ラトヴィア人-複属 ジョーク より be-伝 傾向がある へ ちょっと笑うこと でなく 笑うこと
 zobgalību satīru un sarkasmu.
 嘲笑的な 風刺 そして 嫌味
 ラトヴィア人のジョークは笑うことや嘲笑的な風刺や嫌味ではなく、どちらかというとクスッと笑うことを基本としているらしい。

例文 5-7 でも、nevis 「でなく」により、基動詞 zvanīt 「(チャイムを) 鳴らす」と、部分的な動作を示す接頭辞 ie-が付加された iezvanīt 「(チャイムを) 軽く鳴らす」が対比されている。身内以外の人と身内によるチャイムの鳴らし方の強さが話題となっている。

例文 5-7 (DZ. 26.11.2011)

(..) te piepeši kāds atkal zvanīja pie durvīm. Dikti sparīgi zvanīja. Ne
 ここで 突然 誰か 再び 鳴らす-過3 元で ドア かなり 勢いよく 鳴らす-過3 でなく

tā kā mūsu bērni un mazbērni, kuri tikai iezvana, nevis zvana.
 のように 私たちの 子供-複 と 孫-複 関代 だけ 軽く鳴らす-現3 でなく 鳴らす-現3

Nodomāju – laikam kreditori jau ir klāt.
 思う-過1単 多分 債権者-複 助 be-現3 その場に

すると突然誰かがまたドアのチャイムを鳴らした。かなり勢いよく鳴らした。鳴らすのではなく軽く鳴らすだけのうちの子供や孫たちではないようだ。もしかしたら借金の取立てが来たのかも、と思った。

例文 5-8 では、drīzāk A nekā B 「B というよりもむしろ A」という表現で、基動詞 dziedāt 「歌う」と at-動詞が対比されている。接頭辞 at-は、心を込めずに義務的な動作をこなす意味を基動詞に与える。

例文 5-8 (G)

Dziedātāji drīzāk atdzied nekā cenšas dziedāt.
 歌手-複 むしろ 形だけで歌う-現3 よりも 努力する-現3 歌う

歌手たちは歌おうとしているのではなく、むしろ御座なりに歌っている。

テキストにおける接頭辞の意味的独立性はロシア語の語形成論において指摘されているが (Zemskaja 2009, 168-169, 171, Krongauz 1998, 38-40)、ラトヴィア語でも接頭辞が独立した語として現れる例がある。

2008 年の経済危機後に特に顕在化したのは、基動詞 dzīvot 「生きる」と接頭辞動詞 izdzīvot 「生きのびる」の語形成関係である。例文 5-9 では接頭辞 iz-の “一人歩き” が観察される。

例文 5-9 (J. 21.10.2009)

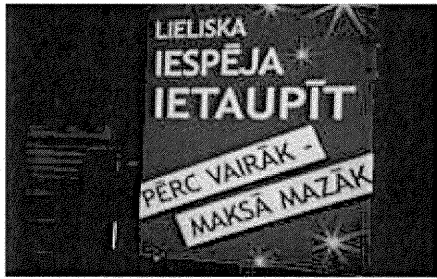
Mūsu misija ir palīdzēt jelgavniekiem šajā pilsētā dzīvot. Tiesa gan, pēdējā laikā šim vārdam jāpievieno priedēklis „iz-”.
 私達の 使命 be-現3 助ける Jelgava の住民-複 与 この 街-位 生きる たしかに 助 最後の 時-位
 この 言葉-与 加える-義 接頭辞

我々の使命は Jelgava の人々がこの町で生きることを助けることである。確かに、最近はこの単語に接頭辞 iz-を付けなければいけないが。

接頭辞が視覚的効果として利用されている広告も存在する。iespēja ietaupīt 「節約のチャンス」というフレーズ自体は、画像 5-1⁷⁹ (本論文筆者撮影) のようにラトヴィア国内の様々な店の張り紙などで見られる。しかし、画像 5-2 のスーパーマーケットチェーン Rimi の広告 (Rimi 営業部部長の提供) で用いられているこのフレーズでは、2 つの名詞と動詞に共通する接頭辞 ie-が強調されて表示されている。

⁷⁹ 広告には LIELISKA IESPĒJA IETAUPĪT 「素晴らしい節約のチャンス」、PĒRC VAIRĀK, MAKSĀ MAZĀK 「買うのは多く、支払は少なく」と書かれている。

画像 5-1：一般の広告



画像 5-2：強調された接頭辞と空間的意味



名詞 *iespēja* 「チャンス、可能性」と動詞 *ietaupīt* 「節約する (PFV)」の各接頭辞 *ie-* を取ると、名詞 *spēja* 「能力」と動詞 *taupīt* 「節約する (IPFV)」である。この広告を考えた営業部長⁸⁰によれば、接頭辞の有無により *spēja taupīt* 「節約 (IPFV) 力」、*spēja ietaupīt* 「節約 (PFV) 力」、*iespēja taupīt* 「節約 (IPFV) のチャンス」、*iespēja ietaupīt* 「節約 (PFV) のチャンス」の4通りの読み方が可能だという。

ここで注目したいのは、接頭辞 *ie-* の空間的意味「中」が買い物かごの「中」を目指す矢印で示されていることである。下向きの矢印は価格が「下がっている」とも考えられるが、接頭辞の空間的意味を視覚化することで、買い物客の関心を引き、彼らが商品を手にとって買い物かごの中に入れることを促している。

ブログからの例文 5-10 では、「何もかも *no-* する」「何もかも *iz-* する」と接頭辞を独立した語のように用い、同じ接頭辞を持つ動詞を列挙している。接頭辞 *iz-* は“し尽くす”といった「浪費」という語彙の意味や「外」という空間的意味を、接頭辞 *no-* は動作の完全性を示している。

例文 5-10 (G.)

(..) *izdomājām*, *ka es visu no...., bet frika visu iz... tas ir -*
 考え付く-過1複 従 私 すべて-対 しかし すべて-対 つまり
frika (..) *izkonspektē, izskūsta, izdzer, izlec, izlej, izdejo, izdara,*
 IZ-要約する-現3 IZ-キスをする-現3 IZ-飲む-現3 IZ-飛ぶ-現3 IZ-注ぐ-現3 IZ-踊る-現3 IZ-する-現3
bet es (..) *nokonspektēju, noskūstu, nodzeru, nolēcu, noleju,*
 しかし私 NO-要約する-現1単 NO-キスをする-現1単 NO-飲む-現1単 NO-飛ぶ-現1単 NO-注ぐ-現1単
nodejoju, nodaru.
 NO-踊る-現1単 NO-する-現1単

私は何もかも *no-* して、Frika は何もかも *iz-* することにした。つまり Frika は要約し、キスをし、飲み干し、飛び出して、お酒を注ぎ、踊って表現し、やってしまう。それに対して私は要約し、キスをし、飲み、飛び跳ね、お酒をこぼしてしまい、踊り、やってしまう。

このようなテキストにおける“独立した語”に近い接頭辞の使用は、接頭辞自体の顕在化が最も顕著な用例である。

⁸⁰ 本論文筆者は2010年2月15日、Eメールによるやり取りでこの意見を伺った。

5.1.2. 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞

テキストにおける接頭辞クリップの定義や機能については、本論文の 3.4.ですすでに述べた。

Blinova によれば、同じ接頭辞を持つ語がテキストの中で繰り返されるこの現象には、情報伝達機能と表現機能があり、前者の機能は接頭辞の持つ意味に、後者の機能は表現性の強調や言葉遊び、テキストのリズム化などに基づくものである (Blinova 2010, 120-148)。Zemskaja や Krongauz も同様に、接頭辞の反復の文体的側面や表現的側面を指摘している (Zemskaja 2009, 167-171, Krongauz 1997, 39-46, 239-240)。

ラトヴィア語では語の第一音節にアクセントが置かれ、否定辞 ne-と義務法を示す接頭辞 jā-が付加されない限り、接頭辞は常にアクセントを持つことから、テキストのリズム化を促進している。

接頭辞クリップにおける接頭辞は、互いに意味的関連のある基動詞を同一の意味でクリップのようにまとめ上げる。じゃんけんのルールを述べた例文 5-11 では、何が何にどのような勝つか話題となっている。ゲー、チョコキ、パーの「殴る」「切る」「包む」という基動詞は、「客体の凌駕」という意味を持つ接頭辞 sa-によりまとめ上げられている。

例文 5-11 (AP. 18.01.2012)

Akmens sasīt šķēres, šķēres sagriež papīru, papīrs satin
石 殴って勝つ-現3 はさみ-対 はさみ 切って勝つ-現3 紙-対 紙 包んで勝つ-現3
akmeni (...).
石-対

ゲーはチョコキをなぐって勝ち、チョコキはパーを切って勝ち、パーはゲーを包んで勝ち。

接頭辞クリップはブログにおける書き込みにおいても見られる。例文 5-12 では、接頭辞 ie-「中」がインターネット上の活動に関する様々な動詞に付加され、「書き込み」や「投稿」という意味を示している。

例文 5-12 (G. スペル訂正)

Pērkons (...) aiziet to ietvītot, iefeisbukot, iedraugot
行く-現3 それ-対 ツイートする フェイスブックに書き込む Draugiem に書き込む
un ieskaipot. Aizņemas no kolēģiem aiFonu, ieāsko Mednim kāda
そして スカイプに書き込む 借りる-現3から 同僚-複 iPhone-対 ISQ に書き込む-現3 Mednis-与 どんな
aiFona aplikācija ir paredzēta šīm darbībām, un atkārtoti, tikai caur aiFonu,
iPhone-属 アプリケーション be-現3 見込む-受過 この 動作-複与 そして 再び だけ 通じて iPhone
ietvīto, iefeisbuko, iedraugo, ieskaipo...
ツイートする-現3 フェイスブックに書き込む-現3 Draugiem に書き込む-現3 スカイプに書き込む-現3

Pērkons はそれをツイートして、フェイスブックに、Draugiem⁸¹に、スカイプに投稿しに行く。同僚達に iPhone を借りて、こういった一連の動作にどんな iPhone のアプリケーションが適しているかを Mednis に ICQ で聞いて、再び iPhone だけを通じて、ツイートして、フェイスブックに、Draugiemに、スカイプに投稿する。

⁸¹ ラトヴィアの SNS サイトである。

接頭辞クリップを論じた本論文 3.4.からこれまでに扱った例文では、動詞間の距離がゼロ、または 2,3 語であった。しかし近い文脈に限らず、接頭辞クリップは動詞間の距離が比較的離れている場合でも実現する。もちろん結束性の観点からは、同じ接頭辞を持つ語が距離的に近ければ近いほど、そして同じ文法形式であれば、接頭辞クリップが担う結束性の機能は高まる。逆に距離的に離れていて同じ文法形式でなければ、接頭辞クリップが担う結束性の機能は当然弱まる。

例文 5-13 と例文 5-14 は、それぞれラジオ番組の司会者 A とゲスト B による発話である。A は例文 5-13 で、観光に関する国際会議に海外の観光業者がたくさん参加したことについて話をしている (タイムコード 3:06)。B はそれに答える形で発話を開始し (3:11)、会議に参加した 260 人のうち 3 分の 2 が海外の観光業者であったと話した上で、例文 5-14 を述べている (4:06)。

例文 5-13 (LR. 25.03.2011)

(..) daudzi ārzemnieki bija sabraukuši paklausīties, ko tad mēs šeit Baltijā
 多くの 外国人-複 be-過3 やってくる-能過 PA-聞く 何-対 では 私達 ここで バルト3国-位
 laikam Latvijā arī darām?
 多分 ラトヴィア-位 も する-現1複
 多くの外国人が、バルト3国、というかラトヴィアで我々が何をしているのかを聞きにやってきました。

例文 5-14 (LR. 25.03.2011)

Pirmo reizi mums izdevās sasēdināt kopā tūrisma attīstītājus (..), tostarp arī valsts
 第1回 私達-与 成功する-過3 座らせる 共に 観光-属 発展させる人-複対 そのうちも 国-属
 tūrisma aģentūru un dabas aizsardzības pārvaldes vadītāju, kas sasēdās pie viena
 観光-属 局-対 そして 自然-属 保護-属 管理局-属 長-対 関代 座る-過3 元で 1つの
 galda un sāka par šīm tēmām kopā runāt.
 机 そして 始める-過3 ついて この テーマ-複 共に 話す
 我々は観光業界者たちと一緒に座らせることができた。その中には国の観光局や自然保護管理局局長もいて、彼らは一つの机に座り、このテーマについて一緒に話し始めた。

例文 5-13 の sabraukt 「来る」の主体は海外の観光業者であり、例文 5-14 の sasēdināt 「座らせる」の客体と sasēsties 「座る」の主体は事実上、同じ海外の観光業者である。これら 3 つの sa-動詞の語形は異なり、その使用には時間的な隔たりがあるものの、まとまった発話の中で動作は同じ主体と客体に関係し、接頭辞 sa-は主体や客体の多さを特徴づけている。

また、同じ話者による発話で、動詞と動作の主体が同じであっても、接頭辞クリップが見られないこともある。例文 5-15 (21:12) の主体 viņi 「彼ら」と例文 5-16 (23:16) の主体 jūs 「あなた方」は同じ人物 (海外での就労経験がある番組のゲスト) を指している。例文 5-15 には縮減アスペクトの接頭辞 pa-による接頭辞クリップが見られるが、例文 5-16 では接頭辞 pa-による接頭辞クリップはない。

例文 5-15 (LR. 12.08.2010)

Vīni, kā dzirdat, ir pabijuši, pastrādājuši citur, atgriezušies Latvijā,
 彼ら ように 聞こえる-現2複 be-現3 PA-いる-能過 PA-働く-能過 他の場所で 戻る-能過 ラトヴィア-位
 kā viņiem gājis, par to jau mūsu stāsts ir sācies.
 いかにか 彼ら-与 調子が…である-能過 ついて それ もう 私達の 話 be-現3 始まる-能過
 お聞きのように、彼らは他の場所にいて、働いて、ラトヴィアに戻ってきました。彼らがどうだったのか
 について、私たちの話は始まっていました。

例文 5-16 (LR. 12.08.2010)

Jūs tur pabijāt, strādājāt. Ko jaunu jūs iemācījāties?
 あなた方 そこで PA-いる-過2複 働く-過2複 何を 新しい あなた方 学ぶ-過2複
 そこにいて、働いていたんですね。どんな新しいことを学びました？

海外就労が話題となる場合、基動詞が示す動作 (būt 「いる」と strādāt 「働く」) は同じ時間幅の行為と考えられる。しかし例文 5-15 で接頭辞クリップが観察されない理由は、2 番目の動詞として pa-動詞ではなく IPFV の基動詞を使うことで、働いていたプロセスに焦点が当てられているからと考えられる。このように、話者が基動詞により強調したいことがある場合には、接頭辞クリップによる語と語の結束性が遵守されないこともある。

5.1.3. 異なる接頭辞を持つ同じ基動詞

異なる接頭辞を持つ基動詞は、テキストや発話で話題となる事象であることが多い。

異なる接頭辞を持つ基動詞の使用には、テキストにおける情報伝達の側面がある。Ventspils 市におけるアパートの私有化の割合を述べた例文 5-17 では、一般の私有化がどの程度行われているのかを示す際に基動詞 privatizēt 「私有化する」が用いられている。一方で、部分的な動作の実現を示す接頭辞 ie-が付加され、その町の私有化が中途半端に行われていること、そして完全な動作の実現を示す接頭辞 no-が付加され、否定辞 ne-と共に、完全に私有化されたものが何ひとつないことが述べられている。

例文 5-17 (NRA. 15.09.1999)

Parastajā privatizācijā tiek privatizēti jau aptuveni 55 % dzīvokļu, (..) Ventspils
 一般的な 私有化-位 受-現3 私有化する-受過 もう 約 フラット-複
 tiešām neveic paātrināto privatizāciju, (..) viss tiek ieprivatizēts, bet nekas
 本当に 否-行う-現3 速める-受過 私有化-対 すべて 受-現3 部分的に私有化する-受過 しかし 何も
 nav noprivatizēts.
 否-be-現3 NO-私有化する-受過

一般的な私有化では、すでに約 55%のフラットが私有化されている。Ventspils は早急な私有化を現に行っていない。なにもかも部分的には私有化されているが、完全に私有化されているものはなにひとつない。

ラジオ番組においても、45 分の会話の中で基動詞とその接頭辞動詞がキーワードとして用いられ、発話全体の結束性を強めている。例文 5-18 から例文 5-20 では、白鳥の研究者が

「輸付けする」という自身の研究活動を、基動詞 *gredzenot* 「輸付けをする」、対応の PFV の接頭辞動詞 *apgredzenot* (動作から連想される空間的意味の接頭辞 *ap-*「周」)、客体の多さを示す接頭辞 *sa-*が付加された *sagredzenot* で示している。

例文 5-18 (LR. 22.09.2010)

Es pats personīgi biju gredzenojis divus gadus pirms šī notikuma.
私 自身 個人的に be-過1単 輸付けをする-能過 2 年-複対 前に この 事件
この事件の前に私個人は2年間白鳥の輸付けをしていた。

例文 5-19 (LR. 22.09.2010)

(..) savā vēl pagaidām neilgajā mūžā esmu apgredzenojis ap 1000 gulbjiem.
自分のまだ 今のところ 長くない 人生-位 be-現1単 輸付けする-能過 約 白鳥-複
まだそう長くはない人生の中で、私は約1000羽の白鳥を輸付けしてきた。

例文 5-20 (LR. 22.09.2010)

(..) visas 3 Eiropas gulbju sugas es esmu sagredzenojis.
すべて ヨーロッパ-属 白鳥-複属 種類-複対 私 be-現1単 沢山輸付けをする-能過
私はヨーロッパの白鳥の全3種類を輸付けしたことがある。

異なる接頭辞の基動詞の連続した使用には、情報伝達の側面の他にも表現的側面がある。これには、基動詞の反復という一種の同語反復やリズム化、言葉遊びなどが関係している。

例文 5-21 では、合唱団の歌う行為が多様であることが基動詞 *dziedāt* 「歌う」に付加されるアスペクト的意味やその他の語彙的意味を与える4つの接頭辞により表されている。例文 5-22 の基動詞 *dzīvot* 「生きる」には、空間的意味が抽象化した接頭辞が付加されている。

例文 5-21 (G)

Koris „Dziesmuvara” izmanto visas iespējas padziedāt, uzdziedāt, izdziedāt,
合唱団 歌力 利用する-現3 すべての 可能性-複対 少し歌う 盛り上がり歌う 歌で表現する
apdziedāt, jo mēs to vienkārši mīlam darīt.
歌で讃えたりからかう なぜなら 私達 それ対 単に 愛する-現1複 する
合唱団「歌力(うたぢから)」は、ちょっと歌ったり、歌って場を盛り上げたり、歌で表現をし、歌で人を称え、からかうようなあらゆる機会を逃しません。なぜなら私達はそれがただ好きだからです!

例文 5-22 (LA. 10.02.2011)

Cilvēki piedzīvo karus, katastrofas ... piedzīvo, pārdzīvo, izdzīvo un
人々は 経験する-現3 戦争-複対 災害-複対 経験する-現3 乗り越える-現3 生き抜く-現3 そして
dzīvo.
生きる-現3
人々は戦争や災害を経験する…経験をして、乗り越えて、生き抜いて、生きるのだ。

例文 5-23 では、パソコンなどの電子機器が人と人とのコミュニケーションを通訳や翻訳

のように媒介をすることが述べられている。基動詞 *tulkot* 「訳す」に7つの接頭辞が付加され、「訳す」行為の様々な様相が示されている。しかし *vienu* 「あること」と *otru* 「違うこと」の代名詞の対比や、最後の「求められるのは訳す（基動詞）ことだけだったのに」で基動詞と7つの接頭辞動詞が対比されることにより、接頭辞動詞の示す電子機器の訳と、私達が実際に話し、電子機器に望んでいた訳が異なることが示されている。

例文 5-23 (DG)

Elektronika tulko. Mēs sakām tai vienu, tā pārtulko, iztulko,
電子機器 訳す-現3 私達 言う-現1 複 それに あること-対 それ 訳す-現3 解釈して訳す-現3
aiztulko, ietulko, pietulko, satulko, aptulko otru,
訳し過ぎる-現3 訳し入れる-現3 訳し補う-現3 訳をでっちあげる-現3 表面的に訳す-現3 別のこと-対
bet prasīts bija tikai tulkot.
しかし 求める-受過 be-過3 だけ 訳す

電子機器は訳をしてくれる。私達がそれ（電子機器）にあることを言うと、それを違うことに訳したり、訳して解釈したり、訳しまくったり、訳し入れたり、訳し補ったり、訳をでっちあげたり、表面的な訳し
かしない。求められるのは訳すことだけだったのに。

例文 5-24 では、基動詞を *rauties* 「引っぱられる」とする接頭辞動詞 *ierauties* 「引きこもる」や抽象化した意味を持つ *aizrauties* 「夢中になる」が連続使用されている。例文 5-23 と同様、異なる接頭辞を持つ基動詞が列挙され、その後基動詞が添えられることで、複数の接頭辞動詞と基動詞が対比され、動詞間の意味的なつながりを読み手に想起させる。

例文 5-24 (DG)

Aizraušanās jau arī ir tikai pusbēda. Īstās bēdas sākas tad, kad
夢中になること すでに も be-現3 だけ ちょっとした不幸 真の 不幸-複 始まる-現3 その時 関代
mēs pēc vairākām aizraušanās kļūstam ierāvušies. Citreiz pēc aizraušanās
私達 後で 複数の 夢中になること-複 なる-現1 複 引きこもる-能過 時々 後で 夢中になること
mēs esam jau atrāvušies, mēs mēdzam būt arī norāvušies,
私達 be-現1 複 すでに 引き除かれる-能過 私達 可能性がある-現1 複 be も 引き離される-能過
aprāvušies, sarāvušies, uzrāvušies, daudz un dažādi
黙って引っ込んでしまう-能過 引きしじむ-能過 嫌なことに引き込まれる-能過 たくさん そして 様々な
rāvušies...
引かれる-能過

夢中になることは、ちょっとした不幸でしかない。本当の不幸が始まるのは、私達が何回も夢中になった後で、引きこもりになってしまったことだ。夢中になると、私達はもう引き除かれたり、もしかしたら引き離されてたり、黙って引っこんだり、引きしじまったり、嫌なことに引きこまれたり、たくさん、様々な形で引っぱられてしまう。

接頭辞動詞の連続使用には、読み手に意味解釈を想像させることに重点を置く言葉遊びの要素がある。よって接頭辞は、基動詞に与える意味による情報伝達の側面はもちろんのこと、表現的側面も持っている。

本節では、書かれた言葉における接頭辞動詞の語形成関係の顕在化を見た。

5.2. 言い直し

書かれた言葉も話された言葉も、コミュニケーションが目的である点では紛れもなく共通しているが、両者には多くの相違がある。その一つは、話された言葉には言い直しが見られることである。

書かれた言葉では、テキストの内容を考える時間は然ることながら、そこで用いる言語形式を推敲する“編集作業”の時間がある程度保障されている。テキストは書き手が考える限りにおいて、また時間が許す限りにおいて整理された状態で読み手に提示される。

それに対して話された言葉では、内容や言語形式を推敲する“編集作業”の時間が保障されていないことが多い上、一度音声的に実現してしまった言葉を取り消すことはできない。自分の言いたいことを適切な調音、文法形式、統語構造、意味内容において“初めの一回”で音声として実現させ、整理された形で聞き手に伝えられることはあまりない。したがって、話している最中により適切な言語表現があることに気付いた場合、話者は口頭で“編集作業”としての言い直しを行う必要がある。

本論文ではこれまで、書かれた言葉からの用例を主に使用してきた。しかし本章で論じる接頭辞動詞の語形成関係の顕在化は、基動詞と接頭辞動詞、または接頭辞動詞が互いに隣接する言い直しの現象においても見られる。本節では、話された言葉に特有の現象である言い直しに見られる接頭辞動詞を考察する。その前に、言い直しとはどのような現象なのかを、接頭辞動詞が関わらない言い直しの例も用いて考察する。

5.2.1. 言い直しの定義

言い直し (correction, repair) とは、語や表現を言い直すことで話者がより良いコミュニケーションを求めて行う行為である。言語がコミュニケーションの手段である以上、常に成功するかはさておき、話者は自分の発話を言い直すことで、自分が思うように、そしてより良く聞き手に理解されようと努めるものである。

言い直しはその構造や機能から、様々なタイプに分類される。例えば発話の途中再開も言い直しのタイプの一つと見なす意見があるが (Heeman & Allen 1999, 529-530)、本論文では接頭辞動詞が関与する言い直しを考察することから、言い直される語や句を第 1 要素、それを言い直す語や句を第 2 要素と呼び、要素間に構造上の対応がある用例を主に扱う。話者が数回の言い直しを行う場合、第 1 要素と第 2 要素を言い直す第 3 要素も存在する。

Schegloff, Jefferson & Sacks は、言い直しを話者自身による言い直し (self-correction) と他者による言い直し (other-correction) に分けている (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)。しかし接頭辞動詞が関与した他者による言い直しは用例が少ないため、本節では話者自身による言い直しを主に扱う。

言い直される第 1 要素は必ずしも文法的に間違っていたり、意味的に不適切というわけではなく、言い直しは広い概念として捉える必要がある。それは同時に言い直しの特定を

難しくするが、このことは 5.2.3. で詳しく述べる。

5.2.2. 狭い意味での言い直し

狭い意味での言い直しは言い間違いの訂正⁸²である。言語形式の面では、第 1 要素に調音上、文法上、または意味上の誤りや不適切さがある。第 1 要素は明らかな誤りであり、第 1 要素は第 2 要素により打ち消されることになる。多くの場合、言い間違いの原因は話者の不注意である。

・ 調音の誤り

調音の誤りでは、音声的性質が似た音や連続する子音の混同などが見られる。流音の l と r を誤った例文 5-25 の話者は、正しい調音点を確認するように第 3 要素中の子音 r を強調して発音している。

例文 5-25 (LR. 22.09.2010)

Šis laidījums, laidījums, raidījums.
この 番組
この #、#、番組。

例文 5-26 や例文 5-27 のように、第 1 要素は中断されることがある。例文 5-27 の Eiropas Savienība 「欧州連合」では、第 1 要素で失敗した調音の部分 (ā) のみが第 2 要素で言い直され (ība)、第 1 要素で問題のない部分 (Savien) は、第 2 要素では省略されている。

例文 5-26 (LR. 14.02.2011)

Par koučingu gan pastarpinā- pastarpināti esam raidījumā runājuši.
ついて コーチング 助 間接的に be-現 1 複 番組-位 話す-能過
コーチングについては、#、間接的に番組で話してきました。

例文 5-27 (LR. 07.06.2011)

Eiropas Savienā- ība.
ヨーロッパ-属 連合
欧州連#、#合。

・ 文法形式の誤り

文法形式、つまり語形の選択の失敗が見られる。

例文 5-28 では、主語の性と数に応じた述部の受動過去分詞の性と数の一致が問題となっている。受動過去分詞が男性単数形→女性単数形→男性複数形と言い直されているのは、

⁸² 事実関係に関わる言い間違いの訂正もあるが、ここでは言語形式に関する言い間違いの訂正を扱う。

話している最中に話者が主語（男性名詞複数形）を最終的に決めていないからである。

例文 5-28 (LR. 07.01.2010)

Īpašā formā tiek ierakstīts, ierakstīta, ierakstīti attiecīgie cipari.
 特別な 形-位 受-現3 書き込む-受過 書き込む-受過 書き込む-受過 対応の 数字-複
 対応の数字が特別な形式で書き込まれる、書き込まれる、書き込まれる。

直説法で対格を取る補語は、義務法では主格で示される。例文 5-29 では、疑問詞の対格 ko が第 1 要素で、文法的に正しい主格 kas が第 2 要素となっている。

例文 5-29 (LR. 08.02.2011)

Ko bija jādara? Kas bija jādara? Kur bija jāmacās?
 何-対 be-過3 する-義 何-主 be-過3 する-義 どこで be-過3 勉強する-義
 何がしなければいけなかったんですか？何をしなければいけなかったんですか？どこで勉強しなければいけなかったんですか？

文法形式の違いが、現実の指示対象の違いとなる例もある。例文 5-30 と例文 5-31 では、受動過去分詞から受動現在分詞への言い直しが行われている。番組の話題は、発芽済みの種（受動過去分詞 diedzētās 「発芽させられた」）と、まだ発芽していない発芽種（用途の意味を示す受動現在分詞 diedzējamās 「発芽させられるべき」）である。A と B の会話である例文 5-30 では、A は発芽済みかそうでないかを区別する受動過去分詞と受動現在分詞を混同し、B がそれを言い直し、A はその言い直しに応じている。例文 5-31 でも A は受動過去分詞と受動現在分詞を混同し、第 1 要素を中断して第 2 要素を強く発音し、言い直しを強調している。

例文 5-30 (LR. 19.08.2010)

A: Neesmu tur redzējusi, lai būtu plašā sortimentā nopērkamas diedzētās sēklas.
 否-be-現1単 助 見る-能過 ために be-願 広い 種類-位 買う-受現 発芽させる-受過 種-複

B: Diedzējamās.
 発芽させる-受現

A: Diedzējamās, jā, jā.
 発芽させる-受現 はい はい

A: たくさんの種類の発芽済みの種が買えるかどうか、見たことはありません。

B: これから発芽する種のことね。

A: これから発芽する種、そうです。

例文 5-31 (LR. 19.08.2010)

Fantastiska iespēja visas šīste diedzētā-, diedzējamās sēklas nogaršot.
 絶好の 機会 すべて この 発芽させる-受現 種-複対 味わう

このような発芽済、これから発芽する種を味わう絶好の機会です。

名詞 *caurskatāmība* 「透明性」は、動詞 *caurskatīt* 「見通す」の受動現在分詞 *caurskatāms* 「見通すことができる」に抽象名詞を派生させる接尾辞 *-ība*-を付加して派生する。例文 5-32 の話者は、活用タイプが異なる動詞（例えば動詞 *lietot* 「使う」→受動現在分詞 *lietojams* 「利用できる」→名詞 *lietojamība* 「利便性」）からの類推や、動詞 *caurskatīt* の過去語幹 *caurskatīj-*と現在語幹 *caurskat-*との混同などにより、**caurskatījāmība* という存在しない名詞を第 1 要素として用い、それを正しい第 2 要素で言い直している。

例文 5-32 (LR. 23.09.2011)

Mēs gribam caurskatījāmību, caurskatāmību, kad mēs varam redzēt, ka tiek
私達 欲する-現1複 透明性-対 従 私達 できる-現1複 見る 従 受-現3
pieņemti lēmumi un kāpēc un kādi ir argumenti.
採択する-受過 決定-複 そして なぜ そして どのような be-現3 論拠-複

どのような決定が行われ、どうして、どのような理由があるかが見えるような#、透明性が我々には必要なんです。

・語彙の誤り

語彙の言い直しでは、第 1 要素と第 2 要素が音声的に似ていたり、2 つの要素の意味が類似している場合がある。接尾辞のみ異なる場合が多い。

語根が同じであるものの意味がふさわしくない語彙の誤りの例として、*atbilde* 「答え」を *atbildība* 「責任」で言い直す例文 5-33 がある。

例文 5-33 (LR. 30.05.2011)

Šodien raidījumā meklēsim atbildi, kur sākas sabiedrības atbilde, atbildība par
今日 番組-位 探す-未1複 答え-対 関代 始まる-現3 社会-属 答え 責任 対して
individu, un ne tikai.
個人 そして 否 だけ

今日の番組では、個人に対する社会の答え、責任がどこから始まるのかの答えを探しましょう。

例文 5-34 では第 1 要素 *atlikt* 「延期する」が接尾辞 *-inā*⁸³が付加された第 2 要素 *atlicināt* 「節約する」に言い直されている。

例文 5-34 (LR. 21.03.2011)

(..) tev jāatliek laiks, jāatlicina.
君-与 延期する-義 時 節約する-義

君は時間を延期しないと、節約しないとイケないよ。

第 1 要素が必ずしも誤りとは言えない場合もある。例文 5-35 では *tauta* 「民族 (英語の people)」の単数与格 (*tautai*) が *tautība* 「民族 (英語の ethnicity)」の単数与格 (*tautībai*) に言い直されている。語根の *taut-*は要素間で共通していることから、第 2 要素では異なる部

⁸³ この接尾辞には習慣や使役の意味があるが、これらの動詞の語形成関係は不明である。

分 (ībai) のみが発音されている。後者が帰属としての民族を示すため、より意味が狭くなり明確化される。

例文 5-35 (LR. 01.04.2011)

(..) latvietim vai krievam, tautai, ībai nav nozīmes.
 ラトヴィア人-与 または ロシア人-与 民族-与 否-be-現3 意味-属

ラトヴィア人かロシア人か、民族には、何人かどうかには意味はない。

例文 5-36 の第 2 要素には名詞 sakars 「関係、関連」、第 1 要素にはその名詞に接尾辞-īb- (抽象名詞を派生) が付加された sakarība 「関連 (性)」が用いられている。第 1 要素は第 2 要素に比べより抽象的な意味を持っていると考えられるが、どちらの要素も類義語である。

例文 5-36 (LR. 10.02.2011)

(..) atkal par šī datu nesēju atlīdzības sakarībā, sakarā.
 再び ついて この データ-複属 ホルダー 著作料-属 関連性-位 関連-位

またこのデータホルダーについて、著作料の関連性で、関連で話すと。

例文 5-35 や例文 5-36 のように第 1 要素が必ずしも誤りではなく、第 2 要素がより適切であったり、互いの要素が類義で同等に適切であると考えられる場合、言い直しをより広く捉えることが必要になると同時に、言い直しの特定は難しくなる。

5.2.3. 言い直しの特定の難しさ

言い直しの特定の難しさには様々な理由がある。ここでは、言い直しを特定する要因が、要素の外にあるのか、それとも要素間の意味的關係にあるのかに大別し、それぞれ言い直しの特定の難しさを挙げる。

5.2.3.1. 要素外の要因

まず、話者は言い直しを常に明示するわけではない。法廷などにおいては「今のは撤回します」と言って、発言や質問を一からやり直したり、途中で個々の語や表現を言い直す場面が見受けられるが、日常生活において「すみません、今間違えました」と謝罪したり、「今の表現を言い直します」と言い直しを宣言することはない。また言い直しの謝罪は、一般に事実関係の誤りを訂正するケースが多く、言語形式に関する言い直しを謝罪することは少ない。言い直しを宣言したり謝罪することで、自身の発話の不適切さを認めることを避けたり、コミュニケーションの流れを損わないための心理的・社会的要因もあるだろう。

言い直しは、要素以外の何らかの手段で常に特定できるわけではない。要素間で「あっ」「えー」というフィラーが常に確認されるわけではなく、要素間で言葉に詰まるとは限ら

ない。言い直しのタイミングについても、要素間のポーズの長短はまちまちである。最短では第1要素を第一音節で中断し、第2要素ですぐに言い直すことがある。逆に第1要素から数秒のポーズを経て、より適切な要素を見つけ、第2要素で言い直す場合もあるだろう。また第1要素を打ち消したり、第1要素よりも意味的によりふさわしいと思われる第2要素が、第1要素に比べて常に強く発音されるとも限らない。

話者が言い直しを明示的に行わなくても、より適切とされる要素が結果的に受容され得るのは、適切に理解しようとする聞き手の積極的な協力によってもコミュニケーションが成り立っていることも背景にある。

言い直しは話者によって“さりげなく”行われる行為である。それゆえに、その解釈には聞き手に委ねられる部分が多いことは認めざるを得ない。

5.2.3.2. 要素間の意味の要因

要素間の意味の要因は要素外の要因よりも複雑である。それは言い直される第1要素が誤りであったり、意味的に不適切であるとする基準の設定が極めて難しいことである。

第1要素が中断される言い直しでは、第1要素の語や語形の特定は文脈により推定するほかない。しかし、中断された第1要素（の推定形）が文法的に誤りであったり、意味的に不適切であるわけでは必ずしもない。

例文 5-37 の第1要素は *pir-* で中断され、実際には第2要素で *vispirms* 「まず」が用いられている。話者は *pirmkārt* 「第一に」や *pirmām kārtām* 「第一に」、*pirmais, ko es gribu teikt* 「私がまず言いたいのは」などと言おうとした可能性があるが、推定される第1要素が誤りであったり、意味的に不適切である理由は考えにくい。

例文 5-37 (LR. 31.03.2011)

Un pir- vispirms mēs sākam tieši ar to.
 そして まず 私達 始める-現1複 まさから それ
 そして第#, まずはそれから始めましょう。

例文 5-38 の中断された第1要素は *industrija* 「産業」と推定されるが、第2要素 *nozare* 「分野」で言い直されている。しかし第1要素でも意味上問題はないと思われる。

例文 5-38 (LR. 02.12.2010)

Pērama nozare vai slaucama nozare var būt tikai, piemēram, šī dzērienu
 叩く-受現 分野 または 絞る-受現 分野 できる-現3 be だけ 例えば この 飲み物-複属
indust- nozare.
 分野

儲かる分野や狙える分野は例えば、この飲料産#, 分野だけかもしれません。

例文 5-39 の中断された第 1 要素は直説法の *iesaku* 「(私は) 勧める」と推定される。この第 1 要素は、第 2 要素の願望法 *ieteiktu* 「勧める」に言い直されている⁸⁴。第 1 要素は文法的には正しいものの、話者は第 2 要素で法を言い直し、自分の考えの確信度を下げている。

例文 5-39 (LR. 04.01.2010)

Es iesa- ieteiktu tepat par cenu nopirkt prāmītes biļeti.
私 勧める-願 ここで で 価格 買う フェリー-属 チケット-対
お金を出してフェリーのチケットを買うことをお勧[#]、お勧めしますね。

例文 5-40 では、推定される第 1 要素 *strādāt* 「働く」が中断され、第 2 要素に新たな *braukt* 「(乗り物で) 行く」が加わり、話者は移動の意味を追加している。

例文 5-40 (LR. 06.01.2011)

Lielāku laiku jau var str- braukt strādāt.
長い-比 時間-対 助 できる-現³ 働く 行く 働く
より長い時間働く[#]、働きに行くことができますよ。

このように、必ずしも第 1 要素が意味的に“間違い”や“不適切”であるわけではない。それでも語の中断は、語が音声的に完全に実現してしまうことを話者が阻止することを意味する。語が中断されたこと、そしてその代わりとなる要素が直後にあることで、少なくとも話者は第 1 要素の音声的な実現よりも、第 2 要素の完全な実現を優先させていることから、話者は第 1 要素よりも適切な第 2 要素を添えていると考えられる。

以上は第 1 要素が中断している例であったが、第 1 要素が実現している例文 5-35 と例文 5-36 のように、言い直される第 1 要素が“間違い”であったり、意味的に“不適切”であるかどうか、つまり第 1 要素が第 2 要素に言い直されているのか、それともどちらも意味的に同等であるのかの解釈の難しさは残る。

日本語の音声言語処理の観点から言い直しを研究する船越・徳永は、「間違いの有無、情報の過不足などの観点からすれば必ずしも必要のない言い直しも存在する。これらは、聞き手の理解を助けるために行われる」としており、このような言い直しは話される言葉に特有の冗長性の現れであると説明している(船越・徳永 2004,1032-1033)。

冗長的であるものの、話者が聞き手の理解を得るために行うことも言い直しとすれば、以下の例文 5-41 から例文 5-45 も広い意味での言い直しの例と捉えられる。

例文 5-41 や例文 5-42 では、第 1 要素に指示代名詞が含まれている。代名詞は状況に応じて指示対象が異なるが、話者と共通の理解が聞き手にあるとは限らない。話者は第 1 要素

⁸⁴ 基動詞 *sacīt* 「言う」と *teikt* 「言う」やその接頭辞動詞 (*iesacīt* 「勧める」と *ieteikt* 「勧める」など) は類義語であるが、時制や法により使用の頻度が異なる。*sacīt* とその接頭辞動詞は直接法の現在時制や命令法で、*teikt* とその接頭辞動詞は直説法の過去時制や未来時制、また願望法で用いられることが多い。そのため、この例文の中断された第 1 要素が *iesacītu* であった可能性は低い。

の代名詞が指す内容を“念のため”第2要素で詳しく展開している。

例文 5-41 (LR. 02.11.2010)

(..) viņš uzņem šo vibrāciju, krāsu vibrāciju.
 それ 吸収する-現3 この 振動-対 色-複属 振動-対

これはこの振動を、色の振動を吸収します。

例文 5-42 (LR.28.10.2011)

(..) viņš nu izprot to situāciju, izprot tās savas iekšējas situācijas
 彼 助 理解する-現3 その 状況-対 理解する-現3 その 自分の 内面の 状況-複対
ar to notikumu.
 関する その 出来事

彼はその状況を理解しているんです、この事件に関する自分の中での状況を理解しているんです。

両要素が類義である言い直しもある。例文 5-43 では、第1要素「小さい (指小形)」から第2要素「小さい (指小形) レベル (指小形) にある」に言い直されている。

例文 5-43 (LR. 01.09.2010)

(..) tāds pusaudzis, kuram tā līdzjūtība un iejūtība ir maziņa, mazā
 そのような 思春期の子 関代 その 共感性 そして 感受性 be-現3 小さい-指 小さい
līmenītī (..).
 レベル-位-指

そういう、共感性や感受性が小さい (指小形)、小さい (指小形) レベル (指小形) にある思春期の子。

例文 5-44 の第1要素「私の個人的経験からの」は、より詳しい第2要素「私が個人的に経験した状況からの」で言い直されている。

例文 5-44 (LR. 25.11.2011)

(..) ar ļoti daudziem piemēriem no manas personīgas pieredzes, no manas
 を持った とても 多くの 例-複 から 私の 個人的な 経験 から 私の
personīgi izdzīvotām situācijām.
 個人的に 経験する-受過 状況-複

非常にたくさんの、私の個人的経験からの、私が個人的に経験した状況からの例で。

例文 5-45 の基動詞 glabāties「貯蔵、保存する」と接頭辞動詞 uzglabāties「貯蔵、保存する」は『標準語辞典』で類義語の説明がなされている (『標準語辞典』) が、ここでは隣接して用いられている。

例文 5-45 (LR. 25.03.2011)

Tā sula var glabāties, uzglabāties un skābt.
 その ジュース できる-現3 保存する 保存する そして 発酵する

その (白樺) ジュースは保存できて、保存できて、発酵できる。

このような類義語の隣接した使用において、各語の弁別的な意味やニュアンスの差異があるかどうか、またあった場合にそれが何かを特定できたとしても、話者が第 1 要素を打ち消して言い直しているのか（狭い意味での言い直し）、または類義語を用いることで意味を広めたり、逆に狭めたりしているのかの判断は難しい。

類義の要素間の意味的關係を探るヒントとなりそうな並列の接続詞 un 「そして」や vai 「または」が要素の間にあっても、類義の要素間に話者が何らかの意味的差異をもたらしているのかは、必ずしも明らかにはならない。pārdzīvot 「体験する」と piedzīvot 「経験する」は類義語であるが、例文 5-46 のように並列の接続詞で結ばれることもあれば、例文 5-47 のように結ばれないこともある。

例文 5-46 (LR. 14.06.2010)

(..) svarīgi stāstīt par to, ko viņi ir piedzīvojuši un pārdzīvojuši šajā izrādē (..) 重要である 語る ついて それ 関代 彼ら be-現3 経験する-能過 そして 体験する-能過 この劇位

彼らがこの劇の中で何を経験して、体験したのかを語ることは重要です。

例文 5-47 (LR. 05.03.2010)

Re, kur ir kaut kas, kas ir noticis, pārdzīvots, piedzīvots. ほら 関代 be-現3 何か 関代 be-現3 起こる-能過 体験する-受過 経験する-受過 それこそが起きた、経験された、体験されたことなんです。

『ラトヴィア語類義語辞典 (Latviešu sinonīmu vārdnīca)』によれば互いに類義語とされる skaidri 「明確に」と nepārprotami 「明確に (=誤解のないように)」は例文 5-48 で、ilgs 「(時間的に) 長い」と garš 「(距離的に) 長い」は例文 5-49 で用いられている。例文 5-49 の名詞 mūžs 「人生」はメタファーにより時間的長さにも距離的長さにも捉えられる。

例文 5-48 (LR. 30.12.2008)

Viņa mums ļoti skaidri un nepārprotami, ļoti godīgi arī pasaka, kā mums ir labāk. 彼女 私達-与 とても 明快に そして 明確に とても 正直にも 言う-現3 いかに 私達-与 be-現3 良い比

彼女は我々がどうあるのがよいのかを、とても明快に、明確に、とても正直に話してくれます。

例文 5-49 (LR. 10.12.2008)

Varbūt tāda apzināta ilgošanās vai tieksme nodzīvot iespējami ilgāku un garāku mūžu. 多分 そのような 意識する-受過 求めること または 願い 生きる なるべく 長い-比 そして 長い-比 人生-対

なるべく長い、長い人生を生きようと意識的に欲することとか願いだと思います。

接続詞 *vai* には「または」という A か B どちらかの選択を必要とする意味と、「すなわち」というどちらの選択も可能である換言の意味がある。上の例文 5-49 の *ilgošanās* 「求めること」と *tieksme* 「願い」や、例文 5-50 の *novakare* 「夕暮れ」と *pievakare* 「夕暮れ」のように、要素が類義の場合接続詞 *vai* は換言の意味で、語が互いに置き換え可能であることを示す。

例文 5-50 (LR. 13.10.2010)

(..) *saulīte jau ir novakarē vai pievakarē, tad visi tie jaunie nez kāpēc*
 太陽 すでに be-現3 夕暮れ-位 または 夕暮れ-位 すると 皆 その 若者 なぜか
sāk domāt savādāk.
 始める-現3 考える 違う風に

太陽がもう夕暮れ時になると [=年をとると]、若かった者は皆、なぜか違う考えをし出すんですね。

要素間に接続詞、特に接続詞 *un* を挟む用例は言い直しかどうかの特定が難しいため、本章では要素間に接続詞を挟まない用例を主に扱うこととする。

第 2 要素が第 1 要素を打ち消さない場合には、5.2.4.1. で論じる言い直しの諸相の一つである言い換えの側面が見られる。例文 5-51 では「地元の」を表す形容詞 *vietējs* と借用語の *lokāls* が隣接している。

例文 5-51 (LR. 06.12.2011)

Bet par šiemte vietējiem, lokālajiem tradīciju nesējiem?
 しかし ついて これらの 地元の ローカルの 伝統-複属 担い手-複
 でもこの、地元の、ローカルな伝統の担い手は？

5.2.4. 言い直しの諸相

同義の、または類義の第 2 要素により第 1 要素を補うことも、広い意味での言い直しと言える。広い意味での言い直しは、第 1 要素を第 2 要素で等質に置き換える「言い換え」や、第 1 要素に意味的に類似した第 2 要素を添えることで、第 1 要素に不足している情報を加えたり、明確化する側面（本章では「類義要素の追加」と呼ぶ）を持つ。

5.2.4.1. 言い換え

第 1 要素を同一の概念を持つ第 2 要素で言い直す場合を言い換えとする。

顕著な言い換えの例は、一方の要素が借用語、もう一方の要素がラトヴィア語本来の語の場合である。要素の間に *jeb* 「つまり」、*proti* 「つまり」のような接続詞や、*tā kā* 「だからその」、*teiksim* 「その、まあ」などの説明的な語や表現がある場合、第 2 要素が第 1 要素の言い換えであることが明示的に示される。

例文 5-52 (LR. 15.02.2011)

Tāda strādāšana ir pašdestruktīva, proti, pašiznīcinoša.
 そのような 働くこと be-現3 自己破壊的な つまり 自己破壊的な
 そのような働き方は、セルフデストラクティブ、つまり、自己破壊的です。

例文 5-53 (LR. 16.06.2011)

Šis kungs ir iemācījies, teiksim, pats menedžēt jeb vadīt savu dzīvi.
 この方 be-現3 習得する-能過 助 自分で マネージメントする つまり 運営する 自分の 人生-対
 この方は、言ってみればご自身で人生のマネージメント、つまり、運営をマスターされているんです。

例文 5-54 (LR. 26.04.2010)

Tas apjoms ir ļoti limitēts, nu tā kā ierobežots.
 その 規模 be-現3 とても 制限する-受過 助 何というか 制限する-受過
 その規模には大きなリミットがあるんです、何というかまあ、制限されているんです。

借用語が第 1 要素の場合、聞き手に理解されない可能性を配慮し、話者が説明を加えていると考えられる。逆に借用語が第 2 要素である場合には、単に借用語の使用のかつこよさのために敢えて添えているほか、同じ、またはほぼ同じ概念を持つ要素を添えることで確実に意味を伝える効果がある。借用語がどちらの要素に来ていても、聞き手が借用語を理解していても、2つの要素により確実に意味を伝える話者の意図は変わらない。

例文 5-55 (LR. 11.03.2010)

Nu nevajag tos latviešus ģermanizēt, vāciskot.
 助 否-必要がある その ラトヴィア人-複対 ģermanizēt vāciskot
 ジャーマナイズする ドイツ人化する
 そのラトヴィア人たちをģermanizēt、vāciskotする必要はないです。

例文 5-56 (LR. 30.04.2010)

Tā ir informācijas kodēšana, informācijas ierakstīšana.
 それ be-現3 情報-属 コード化 情報-属 記録すること
 それは情報のコード化、情報の記録です。

例文 5-57 (LR. 23.12.2010)

Redzēs, cik komplicēts, sarežģīts būs jautājums vai vēstījums.
 見る-未3 どれだけ 複雑な 複雑な be-未3 質問 または メッセージ
 どれだけコンプリケーティッドな、複雑な問題、メッセージなのかがわかるでしょう。

例文 5-58 (LR. 04.12.2008)

Tas ir tā kā tāds mazs kosmos, minikosmos.
 それ be-現3 何というか そのような 小さい 宇宙 ミニ宇宙
 それは小さな宇宙、ミニ宇宙のようなものなんです。

例文 5-59 の第 1 要素は中断されているが、izplatīts 「流通した」と推定される。

例文 5-59 (LR. 11.01.2011)

Ja ir kāds produkts, loti plaši izplat- uu loti populārs produkts.
 もし be-現3 何らかの 製品 とても 広く とても 有名な 製品
 例えば何か製品があつて、すごく広く流#、すごくポピュラーな製品があれば。

要素同士が類義でも一方の要素が文体的に中立で、もう一方の要素が文体的に有標である場合もある。例文 5-60 では greizsirdība「嫉妬」と口語の apbīžošanās sajūta「悔しがること」、例文 5-61 では domāšana「思うこと」と口語の funkteris「考え」が隣接している。

例文 5-60 (LR. 06.12.2011)

Un tas īstenībā ir vaina tai greizsirdībai, teiksim tādai apbīžošanās
 そして それ 実際に be-現3 罪 その 嫉妬心-与 いわば そのような 悔しがること-属
sajūtai.
 気持ち-与

実際に原因となるのは、嫉妬心というか、そういう悔しい気持ちだ。

例文 5-61 (LR. 23.09.2011)

(..) katram cilvēkam ir kaut kāda sava domāšana, savs funkteris, kāpēc viņš
 各 人-与 be-現3 何らかの 自分の 思うこと 自分の 考え なぜ 彼
 dara vienas lietas un nedara kaut kādas citas lietas.
 する-現3 ある こと-複対 そして 否-する-現3 何らかの 他の こと-複対
 どうしてある事はやって、ある事はやらないのかについては、どの人にも何かしら自分の思うことが、自分の考えがあるんです。

要素同士が類義語であり、要素間に言い換えを明示する語や表現がないと、説明的性格が弱くなり、5.2.4.2.で扱う類義要素の追加の現象に近くなる。これは要素の一方が広く理解され、説明する必要がない可能性がある借用語の場合にも当てはまるだろう。

5.2.4.2. 類義要素の追加

類義語や類似した表現が隣接し、尚且つ要素間に説明的な語や表現がなく、同じ概念や近い概念で言い直すことを、本論文では類義要素の追加と呼ぶことにする。

語彙論の Laua は語の類義性に関して、散文や詩における「類義語の密集 (blīvējums, ロシア語で uplotnenie)」を論じている。類義語の隣接では各類義語の細かいニュアンスが出るとしながらも、多くの場合は意味の強調や明確化の機能があるとしている (Laua 1981, 201-204)。文学作品のように時間をかけて練られた言葉ではなく、話された言葉でも同様の強調や明確化などの機能があると考えられるが、その様相は異なると考えられる。

話者の思考と発話が同時に行われている場合、類義要素の追加の現象は、発話の最中に

思考が発展していく過程も示している。なぜなら、発話の中で言い直しをしつつも、話者は自身の思考の展開や細部の内容を修正しているからである。

話者が自身の考えを一つの要素に制限して示し、冗長的な要素を排除することで、思考や言語表現の明確性や簡潔性が得られる。自身の考えを最初の要素だけでは表さずに（表せずに）なるべく複数の要素で言い表すことは、話者が一語では自分の言いたいことを伝えない（伝えられない）ことを意味している。これは一方で、話者の思考自体の明確性の欠如や、言語手段の選択の自信のなさの表れであるが、もう一方で、思考や言語表現の明確性や簡潔性を目指さない（目指せない）ことへの“償いの行為”⁸⁵でもあろう。話者本人が必要と考える範囲で言語手段を複数用いることで、確実にコミュニケーションを成り立たせようとする話者としての責任は果たされる。そして複数の要素のうちどの要素が重要なのか、または要素全体として重要なのかといった判断は、発話の受容者である聞き手に最終的に委ねられることになる。この点で、類義要素の追加は言い直しと同様に、話者と聞き手の双方が関わる行為である。以降、類義要素の追加の現象を見る。

例文 5-62 の第 1 要素は *vaicājums* 「聞くこと」、第 2 要素は *jautājums* 「質問」である。

例文 5-62 (LR. 15.02.2011)

Šeit uzreiz arī varbūt Laumas vaicājums, jautājums.

ここ すぐにも 多分 Lauma-属 聞くこと 質問

ここで早速 Lauma が聞いていて、質問も紹介しましょうかね。

例文 5-63 から例文 5-65 のように形容詞、例文 5-66 のように形容詞化した分詞、例文 5-67 のように分詞が類義要素として追加されている例がある。

例文 5-63 (LR. 25.11.2011)

(..) tu esi agresīvs, dusmīgs, pukojies par to, kas viss notiek (..).

君 be-現 2 単 アグレッシブな 怒っている 腹を立てている-現 2 単 ついて それ 関代 すべて 起きる-現 3

あなたは攻撃的で、怒っていて、起きていることすべてに腹を立てています。

例文 5-64 (LR. 03.03.2011)

Mūzika pati jau ir dziednieciska, ārstnieciska.

音楽 自分で 助 be-現 3 治癒的な 療養的な

音楽はそれ自体治癒的、療養的のです。

例文 5-65 (LR.30.12.2008)

(..) līdz ar to tā kā kofeīns, kas tur ir sastāvā, līdz ar to viņi jūtas

それに なので カフェイン 関代 助 be-現 3 成分-位 それに 彼ら 感じる-現 3

možaki, modrāki, bet tā nav visiem.

元気な-比 洗刺な-比 しかし そのように 否-be-現 3 皆-与

⁸⁵ 類義要素の追加はまた、発話中の間を埋めたり、似た概念の要素を積みかけるなど、発話のテンポを維持する役割を果たしているだろう。

それに、それ [コーヒー] に含まれているカフェインのおかげで、それに、彼らの気分はより元気で、より澁刺になりますが、全員がそういうわけじゃないです。

例文 5-66 (LR. 29.01.2009)

(..) katram cilvēkam ir savs komplekss, jā, jā, komplekts kompleksu, jā,
各 人-与 be-現3 自分の コンプレックス はい はい セット コンプレックス-複 はい
savs ierasts, pierasts.
自分の いつもの 慣れた

どんな人にもコンプレックス、そう、コンプレックスの塊があるもんですよ。そう、お馴染みの、お決まりのね。

例文 5-67 (LR. 19.08.2010)

Auglim ir jābūt pilnīgi gatavam, nobriedušam, vislabāk viņš nobriedis
実-与 be-現3 be-現 完全に 熟した 成熟する-能過 よく-最 それ 成熟する-能過
pie krūma (..).
元で 苗

[トマトの] 実は完全に熟していなければ、成熟していなければいけません。実が成熟して一番おいしいのは苗についている時点です。

動詞では、以下のような類義要素の追加が観察される。

例文 5-68 (LR. 17.06.2010)

Atliek tikai viņu kopt, uzturēt.
残る-現3 だけ それ-対 維持する 管理する
後はそれ [夏の別荘] を維持、管理するだけだ。

例文 5-69 (LR. 23.11.2009)

Informācija ne tikai jāmeklē, jāsameklē, jāatrod.
情報 否 だけ 探す-義 見つける-義 発見する-義
情報は探すだけではだめで、見つけなければいけない、発見しなければいけない。

例文 5-70 では第1要素「発展しない」に第2要素「停滞する」が、第1要素「仕事がない」に第2要素「失業がある」が追加されている。

例文 5-70 (LR. 30.05.2011)

Ekonomika neattīstās, stagnē, nav darba, ir bezdarbs.
経済 否-発展する-現3 停滞する-現3 否-be-現3 仕事-属 be-現3 失業
経済は発展しないで、停滞しています、仕事がなく、失業があります。

同じ概念は追加により繰り返されるが、3つの要素を含むこともある。例文 5-71 では「内向きな性格」が、副詞の要素1つと形容詞の要素2つの計3要素により示されている。例

文 5-72 でも「財政面での援助をする人」が3つの要素にわたって示されている。

例文 5-71 (LR. 17.06.2011)

Viņš ir ciet saziņai, viņš ir slēgts, aizvērts.
 彼 be-現3 閉じられて コミュニケーション-与 彼 be-現3 引きこもっている 閉ざされている
 彼はコミュニケーションに対して閉ざされています、彼は引きこもっています、閉ざされています。

例文 5-72 (LR. 22.09.2010)

Mums nav, teiksim, kaut kādu noteiktu sponsoru, finansētāju, atbalstītāju.
 私達-与 否-be-現3 助 何らかの 特定の スポンサー-複属 援助者-複属 支援者-複属
 私たちにはその、決まったスポンサー、援助者、支援者っていうのはないんです。

意味の研究で類義語を扱う場合にも問題になるが、ここでも2つの語や表現が全く同じ意味内容を指すのかという問題が生じる。例えば要素間で意味の範囲が異なる場合には、類義語の範囲の中での具体化や一般化が確認される。

例文 5-73 では、より意味が広い第1要素の atbalsts 「支援」に対してより意味の狭い第2要素の pabalsts 「手当」が添えられることで、第1要素が具体化されている。

例文 5-73 (LR. 26.11.2009)

Viņi nekad no neviena nav gaidījuši nekādus atbalstus, pabalstus.
 彼ら 決して から 誰一人 否-be-現3 待つ-能過 いかなる 支援-複対 手当-複対
 彼ら [芸術家] は決して誰からも、いかなる支援、手当も期待したことがないんです。

逆に例文 5-74 の第1要素の personības 「有名な人々」により意味が広い第2要素の cilvēki 「人々」が添えられることで、第1要素が一般化されている。

例文 5-74 (LR. 06.12.2011)

(..) cilvēki (..) meklē tieši šoste unikālos personības, šoste unikālos cilvēkus.
 人-複 探す-現3 まさに これらの 類を見ない 有名人-複対 これらの 類を見ない 人々-複対
 人々が探しているのはまさにこういった類を見ない有名な人達、こういった類を見ない人達なんです。

2つの要素が類義語とみなされない場合でも、文脈の中では類義語や類義表現として機能していると解釈できることもある。例えば pārbaudīt 「確認する」と pierādīt 「証明する」は例文 5-75 の文脈では類義語である。

例文 5-75 (LR. 19.08.2011)

(..) holesterīnu pazeminošā darbība ir pārbaudīta, pierādīta ļoti daudzos pētījumos.
 コレステリン-対 低める-能現 活動 be-現3 確かめる-受過 証明する-受過 とても たくさんの
 研究-複位

[椎茸の] コレステリンを低下させる活動はとても多くの研究で確認、証明されています。

片方の要素に借用語を含む例文 5-76 と例文 5-77 も、文脈の中ではその位置（隣接）ゆえに類義語として機能している。

例文 5-76 (LR. 21.08.2011)

Parasti ja cilvēks melo, tad ir kaut kāda tā kā nesimetrija,
 普通 もし 人 嘘をつく-現3 すると be-現3 何か 何というか 非対称
 nesavietojums, ka no vienas puses es smaidu, bet man ļoti raustās kāja, jā.
 否-配列 従 から 一つの 方 私 笑う-現1単 しかし 私-与 とても 震える-現3 足 はい
 人が普通嘘をつくときには非対称みたいな、整然としていない状態みたいなものがあるんです。顔は笑っているけど、足は震えているなんてこともありますし。

例文 5-77 (LR. 02.09.2011)

Latvijā cilvēkiem pavaicā atbildēt uz jautājumiem, (..) tad Latvija dabū
 ラトヴィア-位 人々-複与 質問する-現3 答える へ 質問-複 すると ラトヴィア 得る-現3
 tādas vispārsteidzošākās sakarības, vispārsteidzošākās korelācijas, jā.
 そのような 驚くべき-最 関連性-複 驚くべき-最 相关性-複 はい
 ラトヴィアの人々に質問をして答えを聞いてみると、ラトヴィア [の人々の答え] は最も驚くほど関連性が、最も驚くほど相关性があるんですね。

5.2.4.3. 本論文で扱う言い直しの整理

本章で取り上げる言い直しは、言い間違いの訂正だけでなく、言い換えや類義要素の追加といった諸相も持つ現象と広く理解する。ここで、本章で扱う言い直しの概念を整理する。

第1要素が文法的・意味的に無効 → 言い間違いの訂正（狭い意味での言い直し）

第1要素が文法的・意味的に有効

- ・ 第2要素が相対的に適していると判断できる
- ・ 第2要素が相対的に適しているかの判断が難しい
 - (要素は等質) 言い換え
 - (要素は類義) 類義要素の追加

第1要素が文法的・意味的に無効か有効であるか、第2要素と比べて第1要素が相対的に有効であるか、類義要素が実際の文脈において完全な同義であるかの絶対的な判断が可能ではないことから、5.2.4.1.と 5.2.4.2.で説明した言い換えと類義要素の追加は、広い意味での言い直しが持つ諸相として連続的に捉えることとする。しかし、広い意味での言い直しに見られる多様な諸相のどの側面においても、話者が聞き手へのより良い理解を求めて行う言語行為であることに変わりはない。

5.3. 言い直しにおける接頭辞動詞

広い意味での言い直しにおける語形成関係の顕在化を、本章の初めに挙げた接頭辞動詞の語形成関係の顕在化のパターンである、基動詞と接頭辞動詞 (5.3.1.)、同じ接頭辞を持つ異なる基動詞 (5.3.2.)、異なる接頭辞を持つ同じ基動詞 (5.3.3.) ごとに考察する。

ラジオ番組ではそれぞれのパターンに 24 件、37 件、33 件の用例を見つけた。本論文ではその一部を挙げる。

5.3.1. 基動詞と接頭辞動詞の言い直し

接頭辞は主にアスペクトの意味、時間的意味において基動詞を修正することから、接頭辞動詞が関与する言い直しには、アスペクト的意味の言い直し (5.3.1.1.) と空間的意味 (5.3.1.2.) の言い直しがある。

5.3.1.1. アスペクト的意味の言い直し

第 1 要素が無接頭辞動詞、第 2 要素が接頭辞動詞の例は計 20 件あった。

対立アスペクトの言い直しでは、まず IPFV から PFV への言い直しがある。第 2 要素により動作を一まとまりに捉え直したり、具体化をしている。例文 5-79 では借用語の動詞 *prognozēt* 「予測する」が中断され、PFV の *no-*動詞で言い直されている。

例文 5-78 (LR. 22.11.2010)

Otrs ir arī pašiem iedzīvotājiem, iedzīvotājiem pēc iespējas intensīvāk
 もう一つ *be-*現3 も 自身-複与 住民-複与 できるだけ 集中的に-比
interesēties par to, ko tas cilvēks ir reāli dzīvē veicis, paveicis (..).
 関心を持つ ついて それ 関代 その 人 *be-*現3 実際に 人生-位 する-能過 する-能過
 もう一つは、#住民達が、その人が何を実際にしてきたのか、したのかについてもっと関心を持つことで
 す。

例文 5-79 (LR. 07.01.2010)

Astrologs tagad prog- noprognozēs jā, kad gaidāms tam.
 占星学者 今 予測する-未3 はい 従 待つ-受現 それ-与
 占星学者は何が起こるかをこれから予#、予測するでしょうね。

逆に、PFV から IPFV への言い直しもある。この場合は第 2 要素により動作が一般化されたり、プロセスに重点が置かれる。

例文 5-80 (LR. 11.02.2011)

Sanāk tur cik to gudru cilvēku, jau nobalso, par to balso.
 集まって来る-現3 助 どれだけ その 賢い 人-複 助 投票する-現3 賛成して それ 投票する-現3

賢い人なんかがたくさん集まって投票をします、賛成の投票をします。

例文 5-81 (LR. 30.05.2011)

Es neatņemu citiem cilvēkiem iespēju izpaust, paust arī savu savu savu savus
私 否-奪う-現1単 他の 人-複与 可能性-対 表明する 示す も 自分の 自分の 自分の 自分の
kādus personiskus lēmumus.
何らかの 個人的な 決定-複対
他の人達が自分の、自分の、自分の、自分の個人的決断を表明する、示す機会を私は奪いません。

両要素がアスペクト対立を成すものの、慣用でより頻度が高い第 2 要素による言い直しがある。例文 5-82 の kristalizēties 「結晶となる、確かなものになる」と対応の PFV の接頭辞動詞 izkristalizēties は、『新聞図書館』の件数で前者が 443 件、後者が 3706 件と圧倒的に後者の接頭辞動詞の方が多い(最終確認日: 2012 年 8 月 2 日)。ここでの言い直しの原因は第 1 要素の使用頻度の低さと考えられる。

例文 5-82 (LR. 31.08.2010)

(..) man ir tas kri- izkristalizēties, kā tas notiksies.
私-与 be-現3 それ 確立する-能過 いかにか それ 起こる-未3
それがどのように起きるか [の理解] は私には確#、確立しています。

例文 5-83 (=例文 3-39) には、言語文化論で批判される余剰な PFV 化の接頭辞がある。no-動詞の言い直しの原因は、言語文化論の批判や第 1 要素の使用頻度の低さである。

例文 5-83 (LR. 05.03.2010)

(..) iespējams, ka viņas šobrīd sa- noaktuali- aktualizējušās, jā?
可能性がある 従 それ-複 現在 顕在化する-能過 はい
おそらくそれら [夢を見ることの価値] は現在 #、顕#、顕在化してきていますよね。

動詞 pazīt は IPFV の意味で「知っている」、PFV の意味で「気づく」だが、接頭辞動詞 atpazīt は PFV の意味「気づく」しかない。例文 5-84 では受動現在分詞 pazīstams 「知られた」から atpazīstams 「識別できる、有名な」への言い直しが行われているが、形容詞化されているこれらの受動現在分詞の場合、アスペクト対立は中和されている。

例文 5-84 (LR. 17.11.2010)

Tev pašam bija tāds atklājums, cik, cik nopietnā institūcijā tu tādā
君-与 自身-与 be-過3 そのような 驚き どれだけ どれだけ 真面目な 機関位 君 そのような
pazīst- atpazīstamajā esi iestājies?
そのような 知られた be-現2単 入学する-能過
あれだけ真面目な、あかに知られ#、有名な教育機関への入学は、自分でもかなりの驚きだったんじゃない?

対立アスペクト以外のアスペクト的意味の言い直しでは、以下のような例がある。
まず IPFV の基動詞から縮減アスペクトの pa-動詞への言い直しがあった。

例文 5-85 (LR. 30.12.2010)

Mēs skatīsimies, paskatīsimies uz to iepriekšējo gadu.
私達 見る-未1複 見る-未1複 へ その 前年の 年
前年を見ていきましょう、見てみましょう。

例文 5-86 (LR. 14.06.2010)

(..) viņš tagad stās- uu pastāstīs.
彼 今 語る-未3 語る-未3
彼が今話#、話をしてくれます。

例文 5-87 では、基動詞 gribēt 「したい」が、突然性を表す接頭辞 sa-と自発の意味の再帰要素が付加された接頭辞動詞 sagribēties 「したくなる」に言い直され、突然性や自発の意味が示されている。接頭辞動詞が意味上の主語を経験主を示す与格で要求することから、人称代名詞「私」も主格 es から与格 man に言い直されている。

例文 5-87 (LR. 04.10.2010)

Tātad es gribu, man ļoti sagribas mācīties.
なので 私は したい-現1単 私-与 とても したくなる-現3 勉強する
なので私は勉強したい、とても勉強したくなる気分なのだ。

例文 5-88 では、基動詞 kāpināt 「満たす」が客体の多さの意味の接頭辞 sa-が付加された sakāpināt 「(たくさん) 満たす」により言い直され、動作の高い集中性が明確化されている。

例文 5-88 (LR. 22.01.2010)

Bet ja to pasniedz atbilstošā tonalitātē, nu tādu kāpinātu pat pat pat
しかし もし それ-対 与える-現3 相応の トーン-位 助 そのような 満たす-受過 さえ さえ さえ
pārāk sakāpinātu saturu (...).
あまりに たくさん満たす-受過 内容-対
でももしそれ [お世辞] を相応のトーンで、その、濃い、あまりに濃い内容を言ったとしたら。

例文 5-89 でも、第1要素に基動詞 domāt 「考える」、第2要素に接頭辞 pie-が付加された接頭辞動詞 pie-domāt 「よく考える」が用いられ、動作の高い集中性が明確化されている。

例文 5-89 (LR. 17.06.2010)

Pirmais solis jau konstruējot, būvejojot šo ēku ir jādomā, jāpie-domā pie tā,
最初の 歩 助 建設する-副 建てる-副 この 建物-対 be-現3 考える-義 よく考える-義 元で それ
kā šo koku pasargāt no ūdens.
いかに この 木-対 守る から 水

この建物を建設する際の、建てる際の第一歩は、この木を自らどのように守るかを考える、よく考えることです。

逆に例文 5-90 では、pārzināt 「よく知っている」と zināt 「知っている」から派生した行為者名詞 pārzinātāji 「よく知っている人達」から zinātāji 「知っている人達」の言い直しで、動作の集中性が弱まっている。

例文 5-90 (LR. 17.03.2010)

Vīņi tad, kad nobeidz baleta skolu, ir jau arī labi mūsdienu dejas
 彼ら その時 時 終える-現3 バレエ-属 学校-対 be-現3 すでにも よい 現代の 舞踊-属
pārzinā- pa- zinātāji.
 よく知っている 知っている人-複

彼らがバレエ学校を卒業するときには、すでに良い現代舞踊を精通#、#、知っている人になっています。

5.3.1.2. 空間的意味の言い直し

空間的意味の言い直しの用例は 4 件あった。どの用例でも第 2 要素は接頭辞動詞であった。意味的には第 1 要素でも十分であるが、第 2 要素の接頭辞動詞でその動作の空間性が明確化される。

例文 5-91 では、第 1 要素の基動詞 saistīties 「関わる」が接頭辞 sa- 「共」を持つ第 2 要素の sasaistīties 「結びつく」に言い直されている。

例文 5-91 (LR. 28.09.2010)

Tas saistās, sasaistās ar mūsu šodienas raidījuma tematu.
 それ 関わる-現1単 結びつく-現1単 と 私達-属 今日-属 番組-属 テーマ

それは我々の今日の番組のテーマと関わっています、結びついています。

同様に例文 5-92 では基動詞 saistīt 「関連させる」が接頭辞 pie- 「接」を持つ piesaistīt 「引き付ける、結び寄せる」の能動現在分詞（最上級）に言い直されている。ここでも空間的意味が付加された第 2 要素により、空間的意味が明確化されている。

例文 5-92 (LR. 18.04.2010)

(..) kas Liepājā ir vissaistošākais, vispiesaistošākais cilvēkiem?
 何 Liepāja-位 be-現3 結ぶ-能現-最 結び寄せる-能現-最 人-複与

人々にとって Liepāja で最も [人を] 結ぶもの、最も [人を] 結び寄せるものは何でしょう？

アスペクト的意味と空間的意味の両方の言い直し計 24 件のうち、第 1 要素が基動詞で、第 2 要素が接頭辞動詞の用例は計 20 件、第 1 要素が接頭辞動詞で、第 2 要素が基動詞の用例は計 4 件であった。このことから基動詞と接頭辞動詞が関わる言い直しでは、接頭辞を

後から付加することの方が多くことがわかる。第 2 要素で付加される接頭辞によって意味の拡大よりも縮小がより多く見られ、接頭辞による意味の明確化の機能が示される。

5.3.2. 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞の言い直し

同じ接頭辞を持つ異なる基動詞の隣接は、3.4.で論じた接頭辞クリップである。接頭辞クリップは、テキスト内や発話内の近い文脈、話者による語の説明など自然言語のコミュニケーションや、辞書記述といったメタ言語においても観察されるが、言い直しにおいても観察される。言い直しの要素間には接頭辞が共通し、基動詞が言い直されている。

狭い意味での言い直しには、音声的類似が原因の言い間違いの訂正が 1 件あった。例文 5-93 の空間的意味「付」の接頭辞 *pie-* が付加された接頭辞動詞 *pieskatīt* 「見張る」と *pieskaitīt* 「数え足す」(基動詞 *skatīt* 「見る」と *skaitīt* 「数える」) は、全く異なる意味の動詞である。

例文 5-93 (LR. 15.02.2011)

Darbs nakts laikā tiek pieskatīts pie, pieskaitīts pie tiem faktoriem, kuri ātrāk
 仕事 夜-属 時-位 受-現3 見張る-受過 元で 数える-受過 元で その 要因-複 関代 速く-比
 izsauc izdegšanu.
 引き起こす-現3 燃え尽きること-対

夜にする仕事は、燃え尽き症候群を早く引き起こす要因に見張られています、数えられます。

同じ接頭辞を持つ異なる基動詞は、第 1 要素が中断された言い直しにおいても見られる。第 1 要素の語の第一音節である接頭辞部分は第 2 要素でも実現し、基動詞のみが要素間で異なる。

例文 5-94 では中断した第 1 要素が *pajautāt* 「聞く」と推定され、第 2 要素は *palūgt* 「頼む」である。どちらの基動詞 *jautāt* 「聞く」も *lūgt* 「頼む」も発話に関する動詞であり、接頭辞 *pa-* は具体的な一回の動作を示す。「聞く」よりも「頼む」ということで丁寧な表現となる。

例文 5-94 (LR. 08.12.2010)

Es gribētu zināt tādu lietu, paja- palūgt jums.
 私 したい-願 知っている そのような こと-対 頼む あなた-与
 こういうことを知りたくて、あなたに聞、お願いしたいのですが。

空間的意味の接頭辞が要素間に共通し、移動の様態の言い直しが行われている例がある。例文 5-95 の中断した第 1 要素 (推定) *sanākuši* 「集まって来る (能動過去分詞)」は、第 2 要素 *sabraukuši* 「集まって行く (能動過去分詞)」で言い直されている。第 1 要素の基動詞 *nākt* 「来る」と第 2 要素の基動詞 *braukt* 「行く」では移動の様態が言い直されているが、接頭辞 *sa-* が示す動作の主体の多さや「共」「集」という空間的意味は変わらない。

例文 5-95 (LR. 19.12.2008)

Domājam, tur sanā- sabraukuši bija kādi pāris tūkstoši.
 思う-現1複 そこに 集まって行く-能過 be-過3 大体 2,3 1000-複
 そこに集まって来#, 集まったのは大体 2-3000 人だと思います。

例文 5-96 の推定される第 1 要素は *ieiet* 「入る」である。両要素は基動詞 *iet* 「行く」と *kāpt* 「上る、浸かっていく、ゆっくり歩く」に空間的意味「中」の接頭辞 *ie-* が付加された動詞である。動作の方向は水の中のため、話者は推定される第 1 要素 *ieiet* 「入る」を中断し、「中」という方向性は変えないまま、第 2 要素 *iekāpt* 「中に浸かる」で言い直している。

例文 5-96 (LR. 29.11.2010)

Problēma ir tā, ka cilvēki saunā pasildās, un viņš jau
 問題 be-現3 そのような 従 人-複 サウナ-位 少し温まる-現3 そして 彼 すでに
 nevar tanī vēsā ūdenī ieie- iekāpt.
 否-できる-現3 その 冷たい 水-位 入る 浸かる
 問題なのは、人がサウナで温まってしまうと、冷たい水の中に入#, 浸かるができないことなんです。

例文 5-97 では、推定される第 1 要素 *ielikt* 「中に入れる」が中断され、第 2 要素 *ieklikšķināt* 「(中に) クリックする」で言い直されている。基動詞は *likt* 「置く」と *klikšķināt* 「クリックをする」である。話者は第 2 要素の「クリックする」と事実上同じ意味の表現 *ielikt ķeksīti* 「バツ印をつける」を使おうとしたと推定されるが、第 1 要素を言いきらずに別の表現の第 2 要素で言い直している。言い直しをしても、動作が示す空間的意味「中」は接頭辞 *ie-* により残っている。

例文 5-97 (LR. 04.02.2011)

Jo faktiski mēs ieliek-, ieklikšķinām, ka mēs gribam to to veidu,
 なぜなら 事実上 私達 クリックする-現1複 従 私 したい-現1複 その その 方法-対
 kas ir neatmaksājams.
 関代 be-現3 否-返金する-受過
 [ホームページでの買い物について] なぜなら事実上私達は、返金のない方法がいいという方に中に#, クリックします。

言い換えを明らかに示す接続詞 *jeb* 「つまり」を挟む形で同じ接頭辞を持った異なる基動詞が用いられることもある。ここでは形式的意味の接頭辞 *uz-* (元の空間的意味「上」) が両要素 (基動詞 *būvēt* 「建てる」と *celt* 「建てる」) に共通している。

例文 5-98 (LR. 10.12.2008)

(..) padomju laikā tur bija blakus uzbūvēta jeb uzcelta, tūlīt lietošu žargonā
 ソ連の 時-位 そこで be-過3 そばに 建てる-受過 つまり 建てる-受過 すぐに使う-未1単 隠語-属
 vārdu, ģerevņa ar mazām būdīnām (..).
 言葉-対 村 (ロシア語) を持った 小さな 掘っ立て小屋-複指

ソ連時代、隠語を使わせてもらおうと、小さな掘っ立て小屋が連なる“ヂェレーヴニャ”[ロシア語で「村」]が近くに建築されました、建てられました。

同じ接頭辞を持つ異なる基動詞は類義要素の追加でも見られる。例文 5-99 では第 1 要素 *saņemties* 「一念発起する」(基動詞 *ņemt* 「取る」+再帰要素) が第 2 要素 *saaktivizēties* 「アクティブになる」(基動詞 *aktivizēt* 「アクティブにする」+再帰要素) に追加されている。接頭辞 *sa-* はどちらの要素でも「心的動作の開始」を意味する。

例文 5-99 (LR.22.11.2010)

(..) mums vienkārši ir jāsaņemamas, jāsaaktivizējas.
私達-与 単に be-現 3 一念発起する-義 アクティブになる-義

我々はただ一念発起をするべきです、アクティブになるべきです。

例文 5-100 の第 1 要素は *pārskatīt* 「再検討する」(基動詞 *skatīt* 「見る」)、第 2 要素は *pāranalizēt* 「再分析する」(基動詞 *analizēt* 「分析する」) であり、どちらの要素でも接頭辞 *pār-* が「再」を示す。

例文 5-100 (LR.20.01.2009)

(..) kaut kādā veidā jāpārskata, jāpāranalizē sava situācija.
何らかの 方法-位 再検討する-義 再分析する-義 自分 状況

何とかして自身の状況を再検討、再分析しなければいけません。

例文 5-101 では、第 1 要素が *pamēģināt* 「試す」(基動詞 *mēģināt* 「試す」)、第 2 要素が *paeksperimentēt* 「実験する」(基動詞 *eksperimentēt* 「分析する」) であり、どちらの要素でも接頭辞 *pa-* は一回の動作や「してみる」という試みの動作を示す。

例文 5-101 (LR. 22.11.2010)

(..) lai cilvēki varētu pamēģināt, paeksperimentēt?
ために 人-複 できる-願 試す 実験する

人々が試してみたり、実験してみることができるように。

例文 5-102 では、借用語の *no-* 動詞 *noharmonizēt* 「調和させる」とラトヴィア語起源の *no-* 動詞 *nolīdzsvarot* 「バランスを取る」が隣接している。接頭辞 *no-* は基動詞 *harmonizēt* 「調和させる」と *līdzsvarot* 「バランスを取る」に PFV の意味を共に与えている。

例文 5-102 (LR. 31.01.2011)

Eļļām ļoti bieži ir tāda īpašība: kad vai nu viņas pazemina asinsspiedienu
油-複与 とても よく be-現 そのような 特徴 時 一方で それ-複 低める-現 血圧-対
vai paaugstina, vārdu sakot, noharmonizē, nolīdzsvaro.
もしくは 高める-現 語-対 言う-副 NO-調和させる-現 NO-バランスを取る-現

油にはこういう特徴がよくあるんです。血圧を低めたり高めたりして、つまり、調和させるんです、バランスをとるんです。

例文 5-103 の no-動詞 noskalot 「すすぎ流す」と nomazgāt 「洗い流す」は隣接し、接頭辞 no-が空間的意味「除」で基動詞 skalot 「すすぐ」と mazgāt 「洗う」を共に意味修正している。

例文 5-103 (LR. 07.06.2011)

Un arī mikroorganismi būs noskaloti, nomazgāti un auglis būs ēdams.
 そして も 微生物-複 be-過3 すすぎ流す-受過 洗い流す-受過 そして 実 be-現3 食べる-受現
 それに微生物もすすぎ流されて、洗い流されて、実は食べられます。

以下の用例でも、両要素は完全に類義または類義であり、基動詞の意味も接頭辞の意味も要素間で共通している。

piekonektēt 「コネクトする」と pieslēgties 「接続する」

接頭辞 pie- 「接」 基動詞 konektēt 「コネクトする」と slēgties 「閉じる」

例文 5-104 (LR. 10.05.2011)

(..) tu esi zem bezvada tīkla, respektīvi, piekonektē, pieslēdzies bezvada
 君 be-現2単 下に 無線の 網 したがって コネクトする-現2単 接続する-現2単 無線の
 tīklam kādam.
 ネットワーク-与 何らかの
 無線ネットワーク上にいる、つまり何かの無線ネットワークにコネクト、接続していることになります。

apklāt 「周りに被せる」と apsegt 「周りを覆う」

接頭辞 ap- 「周、表面」 基動詞 klāt 「被せる」と segt 「覆う」

例文 5-105 (LR. 26.11.2009)

Viss ir apsegts, apklāts.
 すべて be-現3 被せる-受過 覆う-受過
 [窯の] 全体は被せられています、覆われています。

pabarot 「満身に養う」と paēdināt 「満身に食べさせる」

接頭辞 pa- 「満足」 基動詞 barot 「養う」と ēdināt 「食べさせる」

例文 5-106 (LR. 21.04.2011)

Mēs varētu daudz ko pa- nu pabarot, paēdināt pasaulē.
 私達 できる-願 たくさんのこと-対 助 満身に食べさせる 満身に食べさせる 世界-位
 私達は世界のたくさんの人をちゃんと養ってあげる、ちゃんと食べさせてあげることができるでしょう。

parunāties 「ちょっと話し合う」 pakomunicēt 「ちょっと交流する」

接頭辞 pa- 「少し」 基動詞 runāties 「話し合う」と komunicēt 「交流する」

例文 5-107 (LR. 03.09.2010)

Jauniešiem bija iespēja dzīvēt redzēt ārzemniekus, parunāties ar viņiem,
 若者-複与 be-過3 可能性 生活-位 見る 外国人-複対 PA-話し合う と 彼ら
pakomunicēt.

PA-交流する

若者たちにとっては外国人に生で会って、彼らと話し、コミュニケーションをするいい機会でした。

izlocīties 「避ける」と izvairīties 「避ける」

接頭辞 iz- 「出」 基動詞 locīties 「曲がる」と vairīties 「避ける」

例文 5-108 (LR. 06.10.2010)

Nu tajā brīdī jau mēs arī redzam, ka sākas dažādas tur izlocīšanās,
 助 その 時-位 すでに 私達 も 見える-現1複 従 始まる-現3 様々な 助 避けること
izvairīšanās (..).

避けること

そういう時にはもう、皆嫌がったり、避けたりし始めるんですよね。

sakarsēties 「熱くなる」と sasildīties 「温まる」

接頭辞 sa- 形式的意味の接頭辞 基動詞 karsēties 「熱くなる」と sildīties 「温まる」

例文 5-109 (LR. 29.11.2010)

Tāpēc mēs kārtīgi sakarsējamies, sasildāmies, un tad organismam pašam ir
 なので 私達 十分に 熱くなる-現1複 温まる-現1複 そして では 体-与 自体 be-現3
 prasība, tāpēc šis zināma kārtība – divas trīs reizes sasildīties, jā, uz tām lāviņām,
 要求 なので この 一定の 順番 2 3 回 温まる はい 上に その 腰掛け板-複
 un tikai tad, jā, tanī vēsā ūdenī.
 そして だけ その時 はい その 冷たい 水-位

[サウナについて] なので私たちは十分に熱くなりましょう、温まりましょう。体もそれを要求しています。

だから2,3回その腰掛け板の上で温まってから、初めてその冷たい水に入る、っていう順番があるんです。

sadzirdēt 「(意識しないで) 聞き取る」と saklausīt 「(意識して) 聞き取る」

接頭辞 sa- 「鋭敏な感覚」 基動詞 dzirdēt 「耳にする」と klausīt 「聞く」

例文 5-110 (LR. 03.03.2011)

Katrs cilvēks ir spējīgs sadzirdēt, saklausīt.
 各 人 be-現3 能力がある 聞き取る 聞き取る

どんな人も何かを (意識しないで) 聞き取る、(意識して) 聞き取る能力があります。

ierūgt 「発酵し始める」 ieskābt 「すえ始める」 どちらも転義で「機嫌が悪くなる」

接頭辞 ie- 「動作の開始」 基動詞 rūgt 「発酵する」と skābt 「すえる」

例文 5-111 (LR. 28.01.2010)

Jo tīri tā sēžot un kritizējot, nu mēs tā ierūgstam, ieskābstam.
 なぜなら 単に 助 座っている-副 そして 批判する-副 助 私達 助 発酵し始める-現1複 すえ始める-現1複
 何もしないで批判ばかりしては、我々の機嫌が悪くなる、損なわれるだけなんです。

同じ接頭辞が要素間に共通していることで、本来は類義語とはみなされないような語が

類義語に近くなることがある。例えば、白鳥研究者が白鳥を「輪付けする」(基動詞 *gredzenot*) することは必然的に「捕獲する」(基動詞 *ķert*) ことになるが、本来は明らかに別々の概念である。しかし要素同士が隣接(統語的に最も近い距離に位置)して文の他の成分に対して同様の役割を果たしているという統語的な理由と、要素間に接頭辞 *sa-*「主体や客体の多さ」が共通するという形式的・意味的理由により、例文 5-112 では、*sagredzenot*「(たくさん) 輪付けする」と *saķert*「(たくさん) 捕獲する」は類義語と見なすことができる。

例文 5-112 (LR. 22.09.2010)

Man jāsaskaita, vai ir jau pāri tūkstoti vai ap tūkstoti, bet jebkurā gadījumā
私-与 数える-義 か be-現3 すでに以上 1000 または 約 1000 しかし いかなる 場合-位

simtiem jau viņi ir sagredzenoti, saķerti.
100-複具 助 彼ら be-現3 輪付けする-受過 捕獲する-受過

千以上か千くらいかは数えなければいけませんけど、どちらにせよ数百羽は輪付けされてますね、捕獲されてますね。

一方の要素は接頭辞動詞だが、もう一方の要素が借用語の接頭辞を持つ例もある。一方の要素が借用語であることから、例文 5-113 は言い換えにも類義要素の追加にも捉えられる。

pārbūvēt「再建する」と *rekonstruēt*「再建する」

接頭辞 *pār-*「再」*re-*「再」 基動詞 *būvēt*「建てる」と *konstruēt*「建てる」

例文 5-113 (LR. 02.06.2010)

(..) viņas ir pārbūvētas, rekonstruētas.
それら be-現3 再建する-受過 再建する-受過

それら [城と屋敷] は再建されています、再建されています。

接頭辞クリップの関係にある接頭辞動詞の言い直しには、言い換えや類義要素の追加の側面が強い。ここでの接頭辞は第 1 要素と、第 1 要素の意味を実質繰り返すことで確実に意味を伝える第 2 要素を共通の意味で結びつける役割を果たしている。

5.3.3. 異なる接頭辞を持つ同じ基動詞の言い直し

異なる接頭辞を持つ同じ基動詞の言い直しでは、アスペクト的意味の言い直しや、空間的意味とアスペクト的意味の言い直しが見られる。

例文 5-114 は、対立アスペクトの PFV から縮減アスペクトへの言い直しである。第 1 要素の *izlasīt*「読み終える」は中断され、第 2 要素の *palasīt*「少し読む」に言い直されている。民謡を読み切らなくても、少し読むだけで必要な答えを見つけることができる、と話者は述べている。

例文 5-114 (LR. 11.11.2010)

Izl- palasot, jā, teiksim, tautasdziesmas, mēs pat tieši varam atrast šīs atbildes.
 PA-読む-副 はい 助 民謡-複対 私達 さえ まさにできる-現1 複 見つける この 答え-複対
 民謡を読み終、読んでみると、私達はまさにこの答えを見つめることができるんです。

例文 5-115 と例文 5-116 は、本論文筆者が聞いた用例である。どちらの用例も親から子供に対する命令形で、第 1 要素は形式的意味の接頭辞を持つ PFV の動詞、第 2 要素は縮減アスペクトを示す pa-動詞である。

例文 5-115 (本論文筆者が聞いた例)

Iedod, padod man roku!
 与える-命2 単 PA-与える-命2 単 私-与 手-対
 手貸して、貸してごらん。

例文 5-116 (本論文筆者が聞いた例)

Uzzīmē, pazīmē kaut ko!
 描く-命2 単 PA-命2 単 何か-対
 なんか描いて、描いてごらん。

例文 5-117 の第 1 要素は nogurt 「疲れる」、第 2 要素は sagurt 「少し疲れる (口語的)」である。第 2 要素により、疲れが軽いことが付け加えられている。しかし慣用では基動詞 gurt 「疲れる」ではなくもっぱら接頭辞動詞の nogurt が用いられる。そのため、この例文は 5.3.1. で論じた基動詞と接頭辞動詞の語形成関係に近く、接頭辞を変えるというよりも接頭辞を付加して程度の軽さを示している、と解釈できる。

例文 5-117 (LR. 29.11.2010)

(..) viņš nogurst, sagurst, sapīts, viņš neko īpaši tur nedara (..)
 彼 疲れる-現3 やや疲れる-現3 ふらふらした 彼 何も-対 特に 助 否-する-現3
 彼は疲れて、ちょっと疲れちゃって、ふらふらで、特に何もしません。

例文 5-118 は、saspīest roku 「(挨拶で) 手を握る」と類義の paspīest roku の言い直しの例である (『標準語辞典』)。なぜ話者はここで sa-動詞を言いきらずに pa-動詞を用いたのかは定かではないが、縮減アスペクトでもある pa-動詞を選んだと考えられる。

例文 5-118 (LR. 28.10.2010)

Ja tu ieej kādā nu kāda kompānijā, kur ir gan dāmas, gan kungi, nu
 もし君 入る-現2 単 何か 助 何か 仲間-位 関代 be-現3 も 淑女-複 も 紳士-複 助
 tā tad ar kungiem ir skaidrs, sveiki, saspīež- paspīežam rokas, un
 それでは 対して 紳士 be-現3 明らかである ハイ 握る PA-握る-現1 複 手-複対 では
 kā darīt ar dāmām?
 いかに する 対して 淑女-複

[挨拶の仕方について] 女性も男性もいる集団の中に入った時、男性の場合はわかるよね、ハイと言って手を握_#、握_#って。では女性 [への挨拶の仕方] はどうすればいいんだろう？

反対に縮減アスペクトから対立アスペクトの PFV への言い直しもある。例文 5-119 では padarīt 「少しする」と izdarīt 「する (PFV)」, 例文 5-120 では pagatavot 「少し、早く料理する」と sagatavot 「料理する (PFV)」が隣接している。

例文 5-119 (LR. 30.05.2011)

(..) mēs padarām, mēs izdarām kaut ko, mēs kopā plecs pie pleca.
私達 PA-する-現1単 私達 する-現1単 何か-対 私達 共に 肩 つけて 肩
一緒に肩をつき合わせて私達は何かをちよっとします、します。

例文 5-120 (LR. 05.08.2011)

Šodien raidījuma gaitā tad skaidrosim, kas vēl varētu būt svarīgi
今日 番組-属 展開-位 そして 明らかにする-未1複 何 まだ できる-願 be 大切である
izvēloties, uzglabājot un pagatavojot, sagatavojot uzturam šo pārtiku.
選ぶ-副 保存する-副 そして PA-料理する-副 料理する-副 栄養-与 この 食品-対
今日は番組の中で、この食品を選び、保存し、サッと料理する、料理する上で何が大切かを明らかにしま
しょう。

例文 5-121 の piebarot 「完全に餌付けする」と pārbarot 「餌付けしすぎる」は、基動詞 barot 「餌付けする」にそれぞれ接頭辞 pie- 「動作の完全性」と接頭辞 pār- 「動作の過度性」が付加されている。しかし前者が副詞 lieki 「余計に」と共に用いられていることで、話者は過度の動作を2つの要素にわたって繰り返していることになる。

例文 5-121 (LR. 22.09.2010)

(..) tā kā skatāmies un tur lieki nepiebarojam un nepārbarojam.
なので 見る-現1複 そして 助 余計に 否-完全に餌付けする-現1複 そして 否-餌付けしすぎる-現1複
なので様子を見ましようね、[白鳥に] 余計なえさをあげないように、あげすぎないようにしましよう。

一方の要素の接頭辞がアスペクト的意味、もう一方の要素の接頭辞が空間的意味や空間的意味が抽象化した語彙的意味を持っている言い直しの例を個別に見る。

例文 5-122 の第1要素「座りこむ」(接頭辞 no- 「下」と第2要素「座る (PFV)」は類義語である。空間的意味の接頭辞を持つ第1要素が中断され、アスペクト的意味(この場合は PFV)を持った第2要素に言い直されている。

例文 5-122 (LR. 19.11.2010)

(..) tad tajā mirklī nosēdā- noteikti apsēdāties, nezinu, pie datora vai
それで その 時位 必ず 座る-過2複 否-知っている-現1単 前に パソコン または
pie papīra lapas.
前に 紙-属 片

その時にパソコンとか書類を前にしたりして座りこ#、必ず座りましたよね。

例文 5-123 では第 1 要素 *ielūkoties* 「中を見る、覗く」(接頭辞 *ie-* 「中」) が中断され、第 2 要素 *palūkot* 「見てみる」(接頭辞 *pa-* 「少し」) で言い直されている。

例文 5-123 (LR. 22.11.2010)

Labi, tā kā ielūk- palūkojiet paši, kas tur notiek.
 良い では PA-見る-命2 複 自分で 何 助 起きる-現3
 さて、どうなっているかここで様子を覗#、見てみてください。

同様に第 1 要素が中断された言い直しでは、例文 5-124 の *paskatīties* 「見てみる」(接頭辞 *pa-* 「少し」) と *apskatīties* 「検討する」(接頭辞 *ap-* 「周」) がある。この 2 つの動詞は、例文 5-125 でも逆の順番で隣接している。

例文 5-124 (LR. 06.10.2010)

Nu paskat- apskatīsimies e-pastus.
 助 検討する-未1 複 Eメール-複対
 それではEメールを見てみ#、検討してみましょう。

例文 5-125 (LR. 04.10.2010)

(..) var apskatīties, paskatīties, ko mēs esam paveikuši.
 できる-現3 検討する 少し見る 何-対 私達 be-現1 複 する-能過
 我々が何をしてきたのかを検討、見ることができます。

例文 5-126 では第 1 要素 *pamēgināt* 「試す」(接頭辞 *pa-* 「少し」) と第 2 要素 *izmēgināt* 「試す」が隣接している。第 2 要素の接頭辞 *iz-* は動作をすることで何かを理解する、確かめる、といった結果を示す。

例文 5-126 (LR. 11.01.2011)

Pamēginiet, izmēginiet.
 試してみる-命2 複 試す-命2 複
試してみてください、試してください。

両要素の基動詞が *pakot* 「梱包する」の例文 5-127 では、第 1 要素の接頭辞 *sa-* は客体の多さを示すアスペクト的意味を持ち、第 2 要素の接頭辞 *ie-* は空間的意味「中」を持つ。

例文 5-127 (LR. 19.11.2010)

Visas burciņas jāsapako, jāiepako.
 すべて 瓶-複 梱包する-義 梱包する-義
 どの瓶も (たくさん) 梱包する、(中に) 梱包する 必要があります。

両要素の接頭辞が似た空間的意味の場合である。例文 5-128 では、接頭辞 no-「除」と接頭辞 iz-「外」の空間的意味は基動詞 vadīt「導く」に対して類義的である。第 2 要素では、接頭辞 iz-と同じ意味を持つ副詞 laukā「外に」によって接頭辞 iz-の空間的意味が強調され、より明確になっている。

例文 5-128 (LR. 07.02.2011)

Pēc tam tiek tas viss novadīts, izvadīts laukā.
 その後 受-現3 それ すべて 撤去する-受過 排出する-受過 外に

その後すべて [水圧機から余分な物質が] 除去されてしまいます、外に排出されてしまいます。

例文 5-129 の「こだわる」という意味の接頭辞動詞は iekerties と piekerties (基動詞 kerties「着手する」)がある。接頭辞 ie-は「中」、接頭辞 pie-は「付」の空間的意味を持つが、どちらの接頭辞も何かに対するこだわりや執着を比喩的に示す空間的意味と捉えられる。

例文 5-129 (LR. 31.03.2011)

Tikai ir viena, kurā mēs esam varbūt pat daudz esam iekērušies,
 だけ be-現3 1つ 関代 私達 be-現1複 多分 さえ 多く be-現1複 愛着を持つ-能過
piekērušies, jā.
 愛着を持つ-能過 はい

私達が執着してしまう、こだわりを持つてしまうことがひとつだけあるんです。

また半接頭辞 līdz-「共に」と接頭辞 sa-「共」による類義要素の追加も見られた。līdzdarboties「共に働く」と sadarboties「協力する」は基動詞を darboties「活動する、働く」とする。

例文 5-130 (LR. 30.05.2011)

(..) kādā veidā līdzdarbojoties, sadarbojoties cilvēkiem sabiedrībā (..).
 どんな 方法-位 共に働く-副 協力する-副 人-複与 社会-位

どんな形で人々が社会で共に働くことで、協力することで。

異なる接頭辞を持つ同じ基動詞の顕在化のパターンの用例の分析は個別的にならざるを得ない。このパターンでは、接頭辞が異なる意味 (アスペクトの意味、空間的意味)である言い直しと、接頭辞が類義である類義要素の追加の両方の側面が見られる。

5.3.4. テキストに見られる類義要素の追加

言い直しは“編集作業”が可能な書かれた言葉においてはあまり観察されないと思われる。ここまで話された言葉を例にして広く言い直しを論じてきたが、言い換えや類義要素の追加に限っては書かれた言葉にも見られる現象である。

例文 5-131 は、話された言葉の特徴が比較的反映されるインタビューである。基動詞 švirkst

「ボツと燃える」と sprāgt「爆発する」に、動作の突然の開始を示す接頭辞 uz-が付加されている。

例文 5-131 (S. 9.2009)

Vēl – es ļoti emocionāli visu uztveru. Tā nevajadzētu, bet es
あと 私 とても 感情的に すべて-対 受け止める-現1単 そのように 否-必要がある-願 しかし 私
tāda esmu. Uzšvirkstu, uzsprāgstu.
そのような be-現1単 ボツと燃える-現1単 爆発する-現1単
あと私はなんでもすごく感情的に受け止めちゃうんです。本当はいけないことかもしれないけど、それが私なんですよね。カッとなって、爆発しちゃうんですよ。

例文 5-132 も対談からの記事である。基動詞は類義語の skūpstīt「キスをする」と bučot「キスをする(口語)」で接頭辞 sa-と再帰要素で「相互の動作」を示す。

例文 5-132 (RB. 13.12.2005)

Tad kā būtu jāsaka pareizi? Saskūpstieties, sabučojieties? Jo valodā jau
では いかにか be-願 言う-義 正しく キスし合う-命2複 キスし合う-命2複 なぜなら 言語 すでに
tik ļoti iegājies "rūgts", ka nezinātu, kā citādi pateikt...
それほど とても 定着する-能過 苦い 従 否-知っている-願 いかにか 他の方法で 言う
[新郎新婦がキスをする時の掛け声をロシア語風に「苦いぞ!」ということについて] じゃあなんて言うのが正しいんでしょう? キスし合って? チュッとし合って? ラトヴィア語に「苦いぞ!」がすっかり定着してしまったから、他になんて言えばいいのか…。

例文 5-133 は対談形式の記事ではないものの、書き手は1人称単数の形式で、賃金値上げを求める教師らのストライキについて意見を述べている。ここでは streikot「ストライキする」と類義語の bastot「ストライキする、サボる」に接頭辞 aiz-+再帰要素が加わり、「没頭」の動作が示されている。

例文 5-133 (JA. 31.01.2000)

Aizstreikojāties, aizbastojāties, učuki? Algas lielākas sagribējuši?
ストライキに夢中になる-過2複 サボるのに夢中になる-過2複 先生-複-呼 給料-複 大きな-比 欲しくなる-能過
Šeku, ņemiet. Pieliks jums dažus latīņus, bet par to jums
ほら 取る-命2複 追加する-未3 あなた方-与 数 ラツツ-複対-指 でも 対して それ あなた方-与
būs divtik daudz strādāt.
be-未3 2倍 多く 働く
先生方、ストライキに熱中しましたか? サボるのに熱中しましたか? もっといい給料が欲しくなりましたって? ほら、どうぞ。数ラツツ(指小形)は増えるだろうけど、その分2倍多く働かなきゃですよ。

例文 5-131 から例文 5-133 の用例では動詞間にカンマが用いられている。言い換えや類義要素の追加は、書かれた言葉においては言い直しの第2要素にあたる語や表現に用いられるカッコや要素間のスラッシュ、ハイフンなどの記号によって、現象として可視化される。

『ラトヴィア語の句読点法 (Latviešu interpunkcija)』によれば、カッコは直前の語を補足的に説明する語に用いられる (Blinkena 2009, 387-388)。下の例文 5-134 をはじめ、本論文では、借用語の接頭辞動詞やその派生語がそれぞれカッコ内、またはカッコの直前で用いられる用例 (第 3 章の例文 3-8 と例文 3-9 や例文 3-18 と例文 3-19) を見た。

例文 5-134 (JA. 23.03.2000)

Vakarā viņi «uzdžemo» (improvizē, spēlējot kopīgi).
 夜-位 彼ら UZ-ジャムセッションをする-現3 即興をする-現3 演奏する-副 共同で
 夜に彼ら [ミュージシャン達] は “ジャムセッションを行う”⁸⁶ (共演で即興演奏をする)。

スラッシュの機能の一つに、「互いに置き換えが可能な概念を示す」語を分ける機能がある (Blinkena 2009, 416)。この記号の使用は、話された言葉において、言い換えや類義要素の追加要素の各要素を分けることになるだろう。

例文 5-135 では、「ロードムービー」という英語の表現とラトヴィア語の借用翻訳の表現を区切る言い換えにスラッシュが用いられている。例文 5-136 と例文 5-137 でも、それぞれ 1 本、3 本のスラッシュの使用が見られる。

例文 5-135 (D. 04.01.2005)

Viss tālākais, kas risinās filmā Salauztie ziedi, ērti ietilpst Džima
 すべて その先のこと 関代 起こる-現3 映画-位 壊す-受過 花-複 適切に 含まれる-現3 Džims-属
 Džarmuša iecienītajā road movie / ceļa filmas žanrā, summējot filmas varoņa
 Džarmuša-属 好む-受過 道-属 映画-属 ジャンル-位 要約する-副 映画-属 英雄-属
 piedzīvojumus, dēkas, atklāsmes un atskāsmes.
 冒険-複対 ハプニング-複対 発見-複対 そして 理解-複対
 映画「ブローケン・フラワーズ」で起こるその先のすべては、映画の主人公の冒険やハプニング、発見や理解をまとめた、まさにジム・ジャームッシュお得意のロードムービーのジャンルに問題なく含まれる。

例文 5-136 (E メール)

Paldies, esmu saņēmusi un solu līdz 15. martam caurlūkot Tavu
 ありがとう be-現1単 受け取る-能過 そして 約束する-現1単 までに 3月 目を通す あなたの
referātu / rakstu!
 発表報告-対 論文-対
 ありがとう、あなたの発表報告/論文を受け取りました。3月15日までに目を通します。

例文 5-137 (E メール)

Cilvēki vienmēr tādās reizēs jautā – par ko / kāpēc viņiem ir jāpiedzīvo
 人-複 いつも そのような 時-複位 尋ねる-現3 何のために どうして 彼ら-与 be-現3 経験する-義
 tādās šausmas / bailes / izmisums? Ko tās mums, cilvēkiem, iemāca /
 そのような 恐怖-複対 不安-複対 絶望-複対 何-対 それら 私達-与 人-複与 教える-現3
pasaka?
 言う-現3

⁸⁶ 接頭辞 uz-は動作の少なさを示すが、この場合接頭辞 pa-よりも口語的な接頭辞である。この例文のカッコ内の説明では、動詞のアスペクトの意味は説明されていない。

こういう時人々はいつも疑問に思うもの。何のために/どうしてこのような恐怖/不安/絶望を経験しなければいけないのか？それは私達人間に何を教えてくれるのか、伝えてくれるのか？

上の例文 5-135 と同じ新聞記事でもスラッシュで区切られた接頭辞動詞の用例が見つかった。例文 5-138 では PFV 化の接頭辞 no- がどちらの語にもある。監督が出演する役者を「選ぶ」ことは「獲得」(基動詞 *skatīt* 「見る」と *copēt* 「釣る」) することでもあり、互いの要素は類義である。

例文 5-138 (D. 04.01.2005)

(..) *tas tapis, vēl pirms Mureju bija noskatījusi/nocopējusi režisore*
 それ 出来上がる-能過 まだ 前に マーレー-対 be-過³ 選ぶ-能過 釣る-能過 監督
Sofija Kopola savam Pazudis tulkojumam (..).
 自分の 消える-能過 翻訳-与

その映画はソフィア・コッポラが自分の映画「ロスト・イン・トランスレーション」のためにマーレーを選ぶ/仕留める前に完成した。

スラッシュの使用は、例文 5-139 にも見られる。ここでは接頭辞動詞 *apliet* 「水をやる」と *aplaistīt* 「水をやる」の命令形がスラッシュを挟んで用いられている。接頭辞 *ap-* は「表面」という空間的意味を示す。基動詞の *liet* と *laistīt* は共に「注ぐ」であるが、後者は前者に反復の意味を示す接尾辞 *-i-* が付加され、語幹の母音交替と子音 *st* の挿入が起こった動詞である。反復の意味を加えることで、書き手は定期的に花に水を与えてほしいことを追加している。

例文 5-139 (書き置きメモ)

Aplejiet / aplaistiet lūdzu puķes!
 注ぐ-命² 複 注ぐ-命² 複 お願いします 花-複対
 お花に水をあげてください/何回かあげてください!

例文 5-140 では異なる接頭辞を持つ同じ基動詞がハイフンで区切られている。ハイフンにはスラッシュのような置き換えの機能はないものの、「同時に機能し、互いを補い合い」、「複合的な概念」を結ぶ機能があり (Blinkena 2009, 409)、実際には類義要素の追加を書記的に示す手段である。

例文 5-140 (E メール、スペル訂正)

Tajā ir arī manas grāmatas un citas mantas, kuras var kaut kur
 それ位 be-現³ も 私の 本-複 そして 他の もの-複 関代 be-現³ どこかに
novākt-izvākt, ja tas ļoti traucēs.
 片づけてしまう-片づけて外に出す もし それ とでも 邪魔する-未³
 そこ [アパート] には私の本や他のものがありますが、すごく邪魔なら、どこかへ片づけても/外に出してもいいです。

接頭辞動詞 *novākt* と *izvākt* はどちらも「片づける」の意味では共通しているが、接頭辞の空間的意味に注目すると *no-*は「去」、*iz-*は「外」である。どちらの接頭辞動詞も類義であるが、ハイフンでつながれることで互いに関連した概念を示すようになる。

記号の使用は、書かれた言葉においても言い換えや類義要素の追加という現象があることを示す。しかし、記号を用いた接頭辞動詞の用例が少ないため、今後もさらなる用例収集と分析が必要である。

5.3.5. “接頭辞の選択”の問題によせて

接頭辞動詞に関わる言い直しは、“接頭辞の選択”という問題を提起する。この問題について考察を試みる。

言語研究や外国語学習で時々見かける「体の選択」や「時制の選択」「語順の選択」といった言語手段の「選択」の中には「接頭辞の選択」もある (Mustajoki & Pussinen 2008 など)。「正しい接頭辞の選択」のように独自の文脈であるものの、ラトヴィア語の言語文化論でも同様の表現が見られる (Skujiņa 1966, Riekstiņa 1974, Šmidebergs 2008)。

選択をすることは、複数の選択肢があることを前提とする。しかし実際には、書かれた言葉を中心とした言語研究、また話された言葉の研究でさえ、研究で扱われるのはすでに“選択後”の言語形式がほとんどである。その点で言い直しは、まさに言語形式の選択中の過程そのものである。接頭辞の有無、もしくはどの接頭辞を使うかという“選択中”の過程は、編集作業が十分になされない話された言葉に耳を傾けてこそ見えてくる。

“接頭辞の選択”が行われていると言えるのは、まず接頭辞があるかないかという点で基動詞と接頭辞動詞の間、また接頭辞があるのならどの接頭辞かという点で異なる接頭辞を持つ同じ基動詞の間である。これはそれぞれ本章の 5.3.1.と 5.3.3.で見た用例において言える。言い直しの過程自体が話者主体の行為であるが、その選択中の過程における接頭辞の有無、そしてどの接頭辞を使うかといった接頭辞の選択は、アスペクト的意味や空間的意味の表示の有無やその選択を行うことであり、“発話の中における接頭辞付加”の活動的な性格を浮き彫りにする。

接頭辞に関わる言い直しの例は、話者が表現しようとするアスペクト的意味や空間的意味といった概念が最初から強く固定されているわけではなく、あくまで話者の判断に基づいて変化をさせたり明確化をするなどの、“調整が可能な”意味であることを示す。

選択の余地という点で逆のことが 5.3.2.で見た同じ接頭辞を持つ異なる基動詞に関わる言い直しに言える。このパターンでは、接頭辞が同じ意味で要素間の意味を結ぶ (クリップする) ため、接頭辞を変えたり付加しないのではなく、同じ接頭辞を選択することが選択肢となりやすく、接頭辞の選択の余地は狭くなる。

5.4. 第5章のまとめ

本章では、接頭辞動詞の語形成関係が顕在化するタイプを 1) 基動詞と接頭辞動詞、2) 異なる接頭辞を持つ同じ基動詞、3) 同じ接頭辞を持つ異なる基動詞に分け、接頭辞がコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていることを記述した。

5.1.では、文学作品、新聞、ブログ、広告といった書かれた言葉を素材に、接頭辞動詞の語形成関係の顕在化を記述した。どのパターンにおいても、接頭辞動詞はその接頭辞の意味を顕在化させ、接頭辞が基動詞に与える意味による情報伝達の側面や、言葉遊びやリズム化といった表現的側面を持っている。

話された言葉に特有の現象として 5.2.と 5.3.で論じた言い直しの現象は、その広い理解でも狭い理解でも、話者が聞き手のより良い理解を得るために言語表現を探し、選び、変える話者主体の行為である。

言い直しにおける基動詞と接頭辞動詞、また接頭辞動詞間の語形成関係の顕在化では、話者が接頭辞を加えたり、逆に取ったり、または変えることにより、アスペクト的意味（対立アスペクト、また個別的なアスペクト）や空間的意味を変化させたり、明確化をしている。これは 5.3.1.で見た基動詞と接頭辞動詞の関係、また 5.3.3.で見た異なる接頭辞を持つ同じ基動詞の関係において言える。逆に、話者が接頭辞を変えないのは、5.3.2.で見た同じ接頭辞を持つ異なる基動詞の関係においてであり、接頭辞クリップによる結束性がその理由である。

5.4.では、書かれた言葉に再び立ち返り、話された言葉における類義要素の追加の側面を持つ言い直しに対応する現象として、接頭辞動詞に対する記号の使用を記述した。

言い直しは、話者が言語形式を整理する途中に言語形式を選択する過程である。5.5.では、接頭辞動詞に関わる言い直しが提起する問題である“接頭辞の選択”を考察した。接頭辞動詞の顕在化のパターン別に見ると、5.3.1.で見た基動詞と接頭辞動詞、5.3.3.で見た異なる接頭辞を持つ同じ基動詞の言い直しにおいては、接頭辞を付けるか付けないか、付けるのであればどの接頭辞を付けるかという、話者が接頭辞を選択する過程が見える。このことから接頭辞の言い直しは、発話の中における接頭辞付加の活動的性格を体現している。

接頭辞に関わる言い直しの例からは、話者が表現しようとする概念に特定のアスペクト的意味や空間的意味が最初から強く固定されているわけではなく、話者が自らの判断に基づいて変化をさせたり、明確化をするなどの“調整が可能な”意味であると考えられる。この点で、結束性により接頭辞の選択に制限があるのは、5.3.2.で見た同じ接頭辞を持つ異なる基動詞の関係においてである。